051
20

36.10.11

伊那民俗叢書

第二輯

しなば昔

伊那民俗研究會編

Z413

伊那民俗叢書　第二輯

昔ばなし

伊那民俗研究會編

65/-26

序

此の本の中に載せた話は、會員の中の幾人かの人達から得たもので、それ等の人達がまだ子供であつた頃、燒き栗の匂ひのする圍爐裡端で白髮の祖母や母たちから聞いた話を、何十年かの後になつて、其の時の顏付きや手眞似などを憶ひ出しながら、何の附け足しもなく其の儘を書き記したものである。中には此の頃になつて、そう云ふ祖母たちを强請んで、昔聞いた事のある話をもう一遍複習して見たやうなのもあつた。

此の中に私の採錄した分のものは主に私の母から聞いたものであつた。五年前に七十五歲で亡くなつた私の母は大へんに話好きの人で、そして又古い家の昔からの仕來りを、少しの煩はしさもなくよく實行して來た人であつた。私は小さい頃から澤山の昔話と古い謠と、其の他いろ〳〵な記憶すべき物語を此の母から聞いた。而し今日になつて私が思ひ出し得るものは其の中の何分の一かも分らない。而しまだ私の記憶に殘つて居る此の類の昔話だけでも四五十程もある所を見れば、まだ〳〵方々に其の幾つかを覺えて居て、私たちに話して呉れそうな人がある筈である。

斯う云ふ話を私達にして呉れた人は、其の若い時分矢張り其の母や祖母たちから聞き覺えて、そして嫁いで來たのであつた。その母や祖母達はそれ等の話を其の又祖母にでも聞いて覺えて居つたのであらう。して見ると今私達が母などから聞いた記憶を辿つて此所で書く話は、少くとも百五十年や二百年の昔から、口から耳へ、昔の家の圍爐裡の焚き火の側で語り傳へられて、そして大勢の昔の子供達が皆それを聞いて成長して來た懐しい物であつたのである。世の中が次第に進歩して、田舍の古い家などでも昔のやうな圍爐裡の焚き火は今や將に消えかゝつて居る。從つて其の圍りで話された懐しい昔話も、もうそろ〳〵忘られる頃になつて來た。今日ではもう斯う云ふ話をして呉れる人も少なくなつたし、又聞かうとする人も無くなつた。雪の降る山國に於ける爐邊の生活は本當に懐しい。其處にはわれ〳〵の祖先の純朴な生活があつたのである。今日の人達がそう云ふ時分の事を顧みるのに最も都合のよいのは斯う云ふ昔話であつた。

私達の覺えて居る昔話の中には此處へ載せる事を憚る樣なのが幾つかあるが、そう云ふのは總て遠慮する事にした。そして又昔から代表的になつて居る程に有名な話も此所には省いて有る。

昭和九年五月

伊那民俗研究會　岩崎清美

目次

一　狸と茶釜……一
二　鬼狼より漏るぞ怖ろしい……三
三　福祿神の話……五
四　本尊樣とお萩の餅（和尚と小僧の話）……五
五　蛇の聟殿……七
六　豆腐屋と旅僧の問答……一〇
七　婆さんに化けた山猫の話……一四
八　火事だ　火事だ……一六
九　お天とう樣とお月樣と夕立樣……一六
一〇　チチンプヨプヨの話……一七
一一　鼠の御殿……一九

一二 鍬を忘れた嘉兵衛の話 ……二一
一三 粗そう惣兵衛 ……二三
一四 和尚樣と燒き餅（和尚と小僧の話）……二五
一五 西行樣の旅 その一 その二 ……二六
一六 ゾクヘイタンの話 ……二八
一七 山寺の坊樣ズイトンの話 ……三〇
一八 後家のお久さ ……三一
一九 法眼樣と狐 ……三三
二〇 猿と獺 ……三三
二一 甘酒の好きな和尚さま（和尚と小僧の話）……三五
二二 節の穴と火伏せのお札（馬鹿聟の話）……三七
二三 ウントコショの話（馬鹿聟の話）……三八
二四 猿の聟殿 ……三九
二五 仁王樣の夜遊び ……四一
二六 鼠の嫁入り ……四三
二七 小僧イヽカンの話（和尚と小僧の話）……四三
二八 裸重兵衛 ……四五
二九 づくなし男 ……四五
三〇 山寺の和尚とチンセイ糖（和尚と小僧の話）……四六
三一 山家の聟殿（馬鹿聟の話）……四八
三二 山猫と獵師 ……四九
三三 織つ子とほんの子 ……五一
三四 和尚樣と八の嬶樣（和尚と小僧の話）……五三
三五 鼠と和尚樣 ……五五
三六 藥賣りと狐の話 ……五六
三七 聞きちがひ ……五九
三八 蛇と犬とお爺さんの話 ……五九
三九 お國自慢 ……六一

四〇 化けたむじな……六三
四一 父樣戀しやほうやれほ……六四
四二 田舍者が上方へ行つた話……六六
四三 歌よみの話 その一 その二 その三……六八
四四 鼻を切られた爺さん……七〇
四五 チンポンガラリンと三味線……七一
四六 片つぽつぽ……七三
四七 此のじようかいな……七四
四八 鳩は八文鳴四文……七六
四九 娘と猿……七七
五〇 姨捨山の話……七八
五一 紹と三人の子供の話……八〇
五二 金杓子星の傳兵衛……八一
五三 相撲取りと蛙……八二
五四 庄屋樣と狐……八三
五五 狸と小間物屋……八六
五六 針はよい〳〵……八七
五七 長い名前……八九
五八 爺さん山で草刈ろう……九〇
五九 蛇の嫁樣の話……九〇
六〇 琴三味線所……九二
六一 牛とお坊さん……九三
六二 長くてこわい話 其の一 其の二……九四
六三 彼岸とヒーガン……九五
六四 千代松と桔梗が原……九七
六五 ひよこすか坊……九八
六六 瓜子姫子……一〇〇
六七 お小僧と甘酒（和尚と小僧の話）……一〇二

六八 石の正兵衛……一〇三
六九 ウントコの話……一〇六
七〇 獺と狐……一〇七
七一 猪と龜……一〇八
七二 餅と和尚と三人のお小僧（和尚と小僧の話）……一〇九
七三 こぼした御飯……一一〇
七四 屁ひり嫁……一一三
七五 蛇と蚯蚓……一一三
七六 木の葉と咲く花の話……一一四
七七 御見舞に行つた聟殿（馬鹿聟の話）……一一六
七八 爺と婆と鼠の國……一一八
七九 三人の繼子の話……一二一
八〇 燕と雀……一二二
八一 狸のきんたま……一二三
八二 お風呂で澤庵を食べた聟殿（馬鹿聟の話）……一二四
八三 機一反千兩……一二五
八四 馬と犬と猫と鶏……一二七
八五 雪に埋もれた餅（和尚と小僧の話）……一二八
八六 和尚とお小僧と馬糞（和尚と小僧の話）……一三〇
八七 憶病者と薄……一三一
八八 爺さんと壯丹餅……一三四
八九 菖蒲と蓬 其の一 其の二……一三五
九〇 繼子と苺の實……一三六
九一 狼を助けた話……一三八
九二 ほとゝぎす……一四〇
九三 蜂と蜘蛛と蟻と財布……一四一
九四 娘が蛇になつた話……一四二
九五 嘘のつきじまひ……一四三

九六 屁の親と子（和尚と小僧の話）……一四四
九七 一の枝に手が屆くぞ……一四五
九八 猿と蟹……一四七
九九 のの屋の娘……一四九
一〇〇 世界中で一番長い話……一五一

昔ばなし

表紙・扉　橋浦泰雄
挿絵　清水對岳坊

狸と茶釜

昔ある村に屑屋の爺さんがあつた。いくら稼いでもしぢう貧乏ばかりして居るので、或る日じっと考へて居るうちにうまい事を思ひ付いた。さつそく日頃仲よくして居る近所の狸の家へ行つて、お前に是非頼みたい事があるが聽いて呉れんか　と云ふと、狸はそれを聞いて、何でもお前の云ふ事なら聽いてやるが、一體そりやあなんだ　と云ふ。外でもないが　狸　狸　一つ茶釜に化けては呉れまいか　なに、茶釜に化けて呉れんかつて、どんな頼みかと思つたらそんな事か、化ける事なら造作はない、何時でも化けてやるぜ、そら　よしか　狸はそう云つて、もうすぐに茶釜に化けてしまつた。

屑屋の爺さんは占めたと思つて、早速その茶釜を風呂敷に包んで背負つて、それをお寺の和尚様の所へ持つて行つた。和尚様　和尚様　わしやあ此の頃珍らしい茶釜を手に入れた、安くしとくで買つておくんなんしよ　と云ふ。どれ／＼どんな茶釜だか見しよう　と云つて和尚様が風呂敷を開けて見ると成る程いゝ茶釜だ、幾らだ　と聞くと、和尚様のこんだから大まけにまけて三兩

だ　と云ふ。和尚樣は三兩なら安いと思つて屑屋からその茶釜を買つた。そしてお小僧に、小僧小僧　此の茶釜を川へ持つて行つてよく磨いて來い　と云ひ付けた。お小僧は和尚樣に云ひ付けられた通り、その茶釜を川端へ持つて行つて、砂を付けてごし〳〵磨くと、其の茶釜が、小僧小僧痛いでそをつと磨け　と云ふ。お小僧はびつくらして飛んで來て和尚樣に其の事を話すと、和尚樣は、そいぢやあ俺が行つて磨いて見ず　と、今度は和尚樣が川端へ行つて、砂で其の茶釜をこすると、和尚　和尚　痛いでそをつと磨け　と云ふ。こりやあ不思議だ、小僧　小僧　その茶釜へ水を一ぱい入れて、火に懸けてお湯を沸かせ　と和尚樣が云ふ。そこでお小僧は云ひ付けられた通り、水を一ぱい入れて其の下へ火を焚き付けた。少し經つと其の茶釜が、小僧　小僧熱いでそろ〳〵焚け　と云ふ。そのうちにだん〳〵と火が燃えて熱くなつて來たので、其の茶釜からぬつと狸が頭を出した、そしてチョン〳〵と足を出した。お小僧がびつくらして居るうちに太い尻尾を出したかと思ふと、大きい狸になつて山の方へピョン〳〵と逃げてつてしまつた。和尚樣はそれでとう〳〵三兩損しちまつた。

鬼狼より漏るぞ怖ろしい

昔ある所に婆樣が一人住んで居つて、その婆樣ん所に良い馬が一匹飼つてあつた。村の伯樂は其の馬が欲しくて欲しくて仕樣がない。或る日伯樂は婆樣の家の戸間口の所へ行つて、若し馬が外へ出て來たら盜んでやりませうと待つて居つた。所が山の狼も其の馬が食べたくて食べたくて仕樣がない、若し馬が外へ出て來たら食べずと思つて、矢つ張り婆樣の家の裏口へ行つて待つて居つた。

そのうちに大雨がざあつと降つて來て、婆樣の家の屋根から雨がぴた〳〵と漏り出した。婆樣はびつくりして桶や鍋を持つて來て雨の漏る所へ當てながら、鬼狼よりも漏るぞ怖ろしい、鬼狼よりも漏るぞ怖しい　と云つて歩いた。それを聞いた狼は、俺が一番おつかない物だと思つて居つたのに、俺よりもまつと怖ろしいもるぞちゆうものがあると見える、そんな物が來ちやあとてもかなはんで、今の中に逃げずと思つて雨の中を飛び出した。それを見た伯樂は、それ馬が飛び出した、追つ掛ろと、狼の跡をどん〳〵おわいて行つて狼の尻つぽをつかまへた。狼は、それもるぞ

が來た　とびつくりして、井戸ん中へ伯樂を振り落して置いて山ん中へ逃げて行つた。
山のお猿が其れを見て、狼に　どうしたのだ　と聞くと、狼は　こう〳〵こう云ふ譯で、今もるぞにつらまつたので井戸ん中へ放り落して置いて來た　と話した。お猿は　もるぞなんちゆう物は有るものか　と云ふと、それでも確かに其奴を井戸ん中へ落して置いて來た　と狼は云ふ。お猿は　それぢやあ俺が行つて見て來てやらず　と云つて、井戸の所へ行つてのぞいて見たが何にも見えん。それで長い尻尾を井戸ん中へツルンと垂らしてやつたら、井戸の中へ落ちた伯樂は、お猿の尻尾を見て繩が下つて來たのだと思つてしつかり握んだ。お猿は中へ引つ込まれちやあたまらんと一生懸命に引つ張る、伯樂は又早く上へ引き上げて貰はつと思つてお猿の尻尾をカ一ぱいに引く。兩方で引つ張り合つて居るうちにお猿の尻尾がピチンと切れてしまつた。
お猿の尻尾はそれからしてあんねに短くなつた、そうして其の時あんまり力んだもんで、お猿の顏は眞つ赤になつたんだつちゆう事た。

福祿神の話

福祿神が或る日旅に出かけた。日が暮れたので百姓家で一と晩泊めてむらふ事になつた。所が福祿神の頭があんまり長いので、方々へ閊へて困つちまつた。仕樣がないもんで壁へ大きい穴を明けて、其所から外へ頭を出して、それでいゝ氣持ちで寢て居つた。
すると近所の人が通りかゝつて、此れは珍らしく長い大きな冬瓜だ、此れを俺に賣つとくれ、値段は幾らだと云ふ。それを聞いた福祿神は　此れは冬瓜ぢやあない、福祿神だ　と云ふと、その人はそれを聞き間違へて、何に　百六十文だ、そりやあ高すぎる、もつと負からんか　と云ふ。そうすると福祿神は　曲らんで斯うして頭を出して寢て居るんだ　と答へた。

本尊樣とお萩の餅

山寺に和尙樣があつた。吝い和尙樣で、おいしい物は自分一人つきりで食べて、お小僧たちには一

つもやらなんだ。今日もお隣からお萩を貰つたもんで、和尚様は喜んで、一人で食べずと思つて居ると、村の百姓が　御法事に來ておくんなんしよ　と云つて來た。和尚様は仕方なしに其のお萩を戸棚の中へ藏つて、小僧　小僧　わしの歸るまで手を付ける事はならんぞ　と云つて置いて御法事に出掛けて行つた。

あとでお小僧たちは、其のお萩が食べたくて食べたくて仕様がない。そのうちに一人のお小僧がたつた一つっさり　と云つて戸棚の中のお萩を一つ食べると、他のお小僧も、俺も一つっ切り　と云つて食べる、一つっ切り一つっ切り　と云つて食べとるうちに皆食べてしまつた。さあ困つた、和尚様が歸つて來ると叱られるに違いない、どうすりやあいゝかとお小僧たちは青くなつて心配しとると、其のうちの一人が、いゝ事を考へたと云つて、お萩の餡を本尊様の口べたへ一めんに塗り着けて置いて知らん顔をして居つた。

そのうちに和尚様は、早く歸つてお萩を食べずと思つて、樂しんで歸つて來て見るとお萩が一つもない。小僧　小僧　さつきのお萩はどうした　とお小僧たちを叱ると、お小僧たちは、わし等あそんな物は知らんがなむ　と云つて居る。そのうちに一人のお小僧が、そう云やあ先刻戸棚を開ける様な音がした。事によつたら本尊様がお食べになつたのぢやあないかな、和尚様　本堂の方

へ行つて御覽なんしよ　と云ふ。和尚様はそう云はれて、急いでお小僧たちと一しよに本堂へ行つて見ると、成る程、本尊様の口べたに一めんと餡が付いて居る。和尚様　和尚様　その本尊様を一つ叩いて御覽なんしよ、きつと白狀するに　と云はれて和尚様は　日頃毎日お經を讀んで上げて居るのに、俺の大事なお萩を無斷で食べるとは　そりや非道い　と棒を持つて來て本尊様の頭を叩くと　クワン　クワンと云ふ。小僧　小僧　本尊様は食はんと云ふぢやあないか　と云ふと、お小僧は　和尚様　それぢやあ今度は釜へ入れて煮て御覽なんしよ　と云ふ。そこで早速大釜へお湯を一ぱい入れ、本尊様をそん中へ入れて煮たら、今度は　クツタ　クツタ　クツタクツタと云つた。

蛇の聟殿

むかし一人の百姓があつた。或る日田圃へ行つて見ると、一匹の蛇が蛙を半分呑みかけて居る。そこでその百姓は蛇に向つて　どうか其の蛙を助けてやつて呉れんか、若しお前が蛙を助けて呉れるならわしの三人の娘のうちの一人をお前にやる　と云つたら蛇は蛙を助けて呉れた。百姓は

家へ歸つて來て考へて見ると、蛇にあんな事を云つたが、娘がそれを承知して呉れるか知らん、困つた事になつたと一日中心配して居つて、御ぜんになつても出て來んので、一番上の娘が、お父樣〳〵御ぜんだにと呼びに行つた。それでも出て來んので譯を聞くと、實は斯う〳〵斯う云ふ譯だ、お前蛇の嫁に行つては呉れまいかと云ふ。それを聞いて娘は、嫌なこんだ、蛇の嫁になんか　と云つて怒つて行つてしまつた。

次ぎに二番目の娘が來たが、此れも怒つて行つてしまつた。おしまひに三番目の娘が來たので譯を話すと、それぢやあわしが蛇の嫁に行きます　と承知して呉れた。百姓は大へんに喜んで、その次ぎの日、仕度をして居ると、娘が、お父樣〳〵わしに針を千本ばかり下さい　と云ふ。それで針を千本持たせて田圃の方へ行くと、蛇がちやんと聟樣になつて迎へに來て居つた。

娘は蛇について山の方へだん〳〵上つて行くと、山奥の方に大きな穴があつて、其處が蛇の家だつた。蛇は俺のあとへついて一しよに來い　と云つて、先きへ立つて穴の中へ入つて行つた。娘はそこで持つて行つた千本の針を穴の中へざら〳〵と入れてやると、それが皆蛇の躰へくすがつて、蛇はとう〳〵死んでしまつた。

其處で娘は山を下りて家へ歸らつとしたが、もう日が暮れて歸れんやうになつてしまつた。困つ

て居ると向ふの方でちら〳〵と火が見えたので、その方へ行つて見ると、毀れかゝつた家が一軒あつて、一人の婆樣が火端で糸をとつて居つた。娘は其處へ入つて行つて、今夜一と晩泊めておくんなんしよ　と云ふと、その婆樣の云ふ事に、此處は鬼の家だで泊めてあげる事は出來ん、今に鬼が歸つて來ると、取つて食べられてしまふ、此處に隱れ簑があるで、それを着て早く鷄小屋へ行つて隱れて居れ　と敎えて呉れた。娘は云はれた通りにして鷄小屋へ行つて寢て居ると、そのうちに鬼共が山から歸つて來て、あゝ人臭い人臭い、婆樣誰か人が來りやあせんか、あゝ人臭い人臭い　と云つて家ぢうを搜して歩いた。そして鷄小屋へ行つて見ると大きな鷄の糞があつたので、足でそれを蹴とばして來て寢てしまつた。

次ぎの朝早く、婆樣は鬼共を山へ出してやつて、そのすきに早く山を下りて行くやうにと娘に敎えてやつた。娘は急いで隱れ簑を着て山を下りて來ると、其處に長者の家があつたので、婆樣の姿になつて其の家へ行つて女衆に使つて貰つて居つた。娘は晝間は隱れ簑を着て汚い婆樣になり、夜は人の見て居らん所で奇麗な娘になつて本を讀んで居つた。すると長者の息が夜其處を通つて其の娘を見て、それを嫁にほしいと云ひ出した。長者の家では晝間になつて家中の女衆たちを一人〳〵招ばつて見たけれど其んな娘は居らなんだ。一番おしまひに御ぜん焚きの婆樣を招ばつて

見ると、婆樣は隱れ簑を脫いで奇麗な娘になつて出て來たので、とう〳〵其の娘が長者ん所のお嫁さんになつた。

豆腐屋と旅僧の問答

村の或るお寺に和尙樣があつた。その和尙樣の所へ旅の坊樣から、何時何日に問答に行く　と云ふ手紙が來た。所が其の和尙樣は、問答と云ふ事は話には聞いたが、まだ一べんも仕た事がない。人の話によると餘程六づかしい事らしい。こりやあ困つた事になつた、旅僧が來たらどうすりやあいゝかと、和尙樣は心配して御ぜんもろく〳〵食べずに考へて居つた。

其處へ門前の豆腐屋がやつて來た。和尙樣　へィ今日は　豆腐屋はいつものとうり和尙樣の居るお座敷の方へ來て見ると、和尙樣が何時になく六づかしい顏をして考へ込んで居る。和尙樣　和尙樣　どうしました、顏色も大へん惡いし、元氣もないが、お腹でも痛みますか　と聞くと、ヤア豆腐屋か、お腹は痛くないが實は困つた事が出來てな、今日旅僧から手紙が來て、何時何日に問答に來ると云つて來た、俺はまだその問答ちう事をした事がなひで、どうしたらいゝかと心配しとる所だ　と和尙樣が云つた。それを聞いて豆腐屋が、成る程、併し和尙樣、問答ちう事はどの坊樣もやる事なんでせう、譯はありませんや、何なら俺が一つ和尙樣に替つてやつて見ませうか　すると和尙樣が　豆腐屋、お前やつて呉れるか、そいつあ有難い、ちやあたのんだぞ。

門前の豆腐屋は和尙樣から問答を引き受けた。

いよ〳〵其の日になると、豆腐屋は和尙樣の金襴のお袈裟を懸け、頭巾を被つてきよくろくに腰を掛け、すつかりお寺の和尙樣になつて待つて居つた。其處へ旅僧は、今日こそ此の寺の和尙をへこましてやらつと思つて大威張りでやつて來た。來て見ると和尙がちやんときよくろくに倚りかゝつて待ちかまへて居る。そこで旅僧は和尙の前へ出て無言の問答を始めた。

先づ最初に兩手の指で大きな輪を作つて和尙の前へ出した。すると豆腐屋の和尙も默つて兩手を前に出して、手のひらを上下に向き合はせて見せた。今度は旅僧が兩手の指を十本出して見せると、和尙は片手の指を五本出した。旅僧が三本の指を出したら、和尙は人差し指で大きなあかんべいをして見せた。それを見た旅僧は、こりやあ豪い坊樣だ、とても自分の樣な者は此の坊樣には敵はんと思つて逃げて行つてしまつた。

障子の穴から此の樣子を一生懸命に覗いて見て居つた本當の和尙樣は、豆腐屋の問答にすつかり

感心してしまつた。其處へ豆腐屋が　和尚樣　和尚樣　問答なんてつまらんもんだ　と法衣のお尻をまくつて入つて來た。和尚樣が豆腐屋に　一たいありやあ何の眞似だと聞くと　豆腐屋の云ふ事に、旅僧奴、最初に、手前の所の豆腐は丸いか　とこいて指で丸を拵へて見せるもんで　イヤ俺の所の豆腐は四角い　と兩手を斯う上下へ並べて四角だと敎えてやつた。すると、一てうが十文か　とこいて指を十本出したもんで　イヤ五文だ　と指を五本出してやつた。すると三文に負けんか　と指を三本出しやあがつたんで、俺が赤べいをしてやつたら、旅僧奴呆れて逃げて行つてしまつた。問答なんて譯のないもんだ　と云つた。

問答に負けた旅僧は、それから隣村のお寺へ行つて其處の和尚に云ふ事に、彼所のお寺の坊樣は本當に豪い坊樣だ、今迄にあんた豪い坊樣は見た事がないと云ふ。どうしてだ　と聞くと、今日問答に行つて、先づ最初に『地球は』と指で丸の形をして見せたら、兩手を上と下にして『天地の間に在り』と來た、『十方は』と指を十本出したら向ふでは『五戒で保つ』と指を五本出した。仕方がないので今度は『三千世界は』と指を三本出して見せたら『眼中に在り』と指で眼を大きく開けて見せた。どうもあんな豪い坊樣には初めて會つたと感心して居つた。

婆さんに化けた山猫の話

昔ある所に源さと云ふ魚屋があつた。或る日魚を擔いで峠を越えて、向ふの村へ行く途中で、一匹の山の犬に出會つた。山の犬は源さの擔いどる魚を見て、お犬樣に一本　と云ふ。源さは怖ろしいもんで一本やると、すぐ食べてしまつて又　お犬樣に一本　と、後からついて來る。魚をやらんと自分が食べられそうだで又一本やつた、そうして一本一本とやるうちに、大へんあつた魚を皆やつてしまつた。もう魚がなくなつたと見ると、今度は山の犬は源さを喰へて山の奥での方へ飛んで行つて、柴を載せてその上へ坐つて居つた。

その中に澤山の山の犬がぞろ〳〵と集まつて來たので、源さは愈々怖ろしくなつて、側にあつた高い木の枝へのして行つた。山の犬はそれを見て、一匹一匹の背中を台にして段々高く上つて來て、今にも源さの足の所へ手が屆きそうになつた。それで源さは夢中になつて、刀を拔いてスタンと斬り付けると、今度は其の次ぎに居る奴が又手を伸ばして源さを捉まへつとする。それを斬る又他の奴が來る。何時までもそうやつて居る間に、一匹の山の犬が氣が付いて　これぢやあ仕

樣がないで、新道の鍛治屋の婆さんを賴んで來まいか　と云ふ。そしてちきに其の婆さんを連れて來た。

婆さんは源さの顏を見てにや〳〵笑つて居つたが、そのうちにする〳〵と其の木へ登つて來て今にも源さの足を捉まへそうになつたもんで、源さは夢中になつて、刀で婆さんの手をスタンと叩き斬つた。婆さんは斬られて　ギァー　と大きな聲で泣きながら何所かへ逃げて行つてしまつた。そのうちにだん〳〵と明るくなつて來て、山の犬は皆何所かへ行つてしまつたので、源さも安心して木から下りて來た。

木から下りた源さは、其の足で直ぐに新道の鍛治屋さへ行つて　ゆんべ何か變つた事はなかつたか　と聞くと、あつた〳〵、家の婆樣がゆんべ左の手を傷めて、痛がつて奥でに寢て居る　と云ふ。それを聞いていよ〳〵怪しいと思ひ、奥でへ行つて見ると、成る程、婆樣は痛い〳〵と云つて苦しがつて居る。源さは婆樣の側へ行つて　どうした〳〵、その手をちよっと見しよう、ちよっと見しよう、見しよう、見しよう　と云つて、嫌がる手を引つ張り出して見ると、ゆんべ自分が斬つた刀傷だつたので、此奴め　と云つて刀を拔いて斬り付けると　ニャーゴ　ニャーゴ　流しの下の骨を見よ　と云つて死んでしまつた。それを見ると刼を經た山猫だつた。そして流し

の下には人間の骨が山のやうにたまつて居つた。これは山猫が鍛治屋の婆様を食べて、そして自分が婆様に化けて、山の犬と一しよになつて人間を殺して食べて居つたのだつた。

火事だ火事だ

昔ある所にかじかと　どじようと　金魚と　もろこが住んで居つた。ある日村に火事があつて半鐘がチャン〳〵と鳴ると、かじかが最初に火事だ火事だと騒ぎ出した。するとどじようが何所だ〳〵と云つた、金魚が近所だ〳〵と云ふと、もろこがもう消えたと云つた。

お天とう様とお月様と夕立様

むかしお天とう様とお月様と夕立様と三人が揃つて旅に出かけた。所が生れつき氣の荒つぽい夕立様の事だもんで、行く先きで暴びまわつて仕様がない。それでお天とう様もお月様も、夕立様と一しよに旅をするのがいやになつた。そこで二人は内しよで相談をして、ある朝、暴び草臥れて朝寝坊をして居る夕立様を置き去りにして、默つて宿屋を立つてしまつた。

さんざ寝て漸つと眼を醒ました夕立様は、お天とう様とお月様が見えんので、やゝけて支度をしながら宿屋の亭主に、二人のお連れはどうした　と聞くと、亭主は　お天とう様もお月様も、もう先刻にお立ちになりました　と云ふ。それを聞いて夕立様の云ふ事に、成る程、月日の立つのは早いものだ。

チチンプヨプヨの話

むかし或る所に百姓のお爺さんがあつた。ある日山の上へ畑作りに行つて、お晝になつたのでお爺さんは持つて行つたお蕎麥の粉でおかいもちを搗いて其れを食べて、殘つたのを桑の木の株へ塗り付けて置いた。そうして又畑を作つて居ると、そのうちに山雀が一羽舞つて來て、其のおかいもちを食べずと思つて、それにひつ着いてばた〳〵して居るので、お爺さんは可哀相に思つて、その山雀をつらまへて、その足に付いて居るおかいもちを口で嘗めて取つてやつた。するとどうした機會かで、其の山雀がお爺さんの口の中へッル〳〵ッと入つて行つて終つた。

お爺さんがびつくりして居ると、そのうちにお臍の横へ山雀の尻尾がチョンと出て來たので、ちよつと引つ張つて見たら、チチンプヨプヨゴヨノオンタカラ　と啼いた。これは面白いと、もう一ぺん引つ張つて見ると又チチンプヨプヨゴヨノオンタカラと啼く。これは面白いと、幾くらも引つ張つて居るうちに、とても良い事を考へ出した。一つこれをお殿樣に聞かしてあげずと思つて、其の次ぎの日にお殿樣のお藪へ行つて、竹をタン〳〵と伐つて居ると、其處で竹を伐つて居るのは何奴だ　と御家來が云ふ。ハイ日本一の屁ひり爺であります　と其のお爺さんが答へた。それぢやあ此處へ來て屁をひつて見よ　ハイ　とお爺さんは返事をして、お殿樣の前へ行つて腹を出して山雀の尻尾を引くと、チチンプヨプヨゴヨノオンタカラと、とてもいゝ聲で啼いた。お殿樣は大へんお賞めになつて、いろ〳〵の寶物を澤山に下さつた。それを聞いたお隣の慾深爺さんは、俺もお殿樣に屁をひつて聞かして御褒美を貰はずと思つて、お芋や何かを大へん食べておならの出るやうにして、其の次ぎの日にお殿樣の藪へ行つてタン〳〵と竹を伐つて居つた。そうすると昨日のやうに御家來が來て、其處で竹を伐つて居るのは何奴だと云ふ。日本一の屁ひり爺でありますと　慾深爺さんが答へる。それぢやあ此處へ來て屁をひつて見よ　ハイ　と返事をして、お殿樣の前へ行つてお尻をまくつた、そうして力んでおならをせ

つと思つたら、おならと一しよにおばゞがぐた〳〵〳〵と出てしまつた。お殿樣は、不屆きな奴だと大へんにお叱りになつて、刀を拔いて爺樣のお尻をスタンと切つた。爺樣はお尻を切られてえゝん〳〵と泣きながら家の方へ歸つて行つた。

慾深婆樣は今に爺樣がたんと御褒美を貰つて來るらと思つて待つて居ると、向ふの方で爺樣の大きな聲が聞える。急いで門へ出て見ると向ふの方から爺樣が、何か赤い物をぶら下げて大きな聲をして來る。それを見た婆樣は、こりやあ爺樣が御褒美に赤い着物を貰つたので、喜んで呼ばつて來るのだと思つて、御馳走を拵へて待つて居ると、其處へ爺樣はお尻を切られて赤い血をたら〳〵流して泣いて歸つて來た。

鼠の御殿

むかし或る所にお爺さんとお婆さんが住んで居つた。或る日お爺さんが山へ行つて、仕事をして居るうちにお晝になつたんで、木の枝に懸けて置いたお握飯を持つて來て、それを解く拍子に、コロンと一つ落としたら、そのお握飯がコロ〳〵コロ〳〵と何處までも轉れて行く。此れを失くし

ちやあ大へんと、お爺さんが其の後をドン〳〵追つ掛けて行つたら、大きな岩の側の鼠の穴ん中へ其のお握飯が轉れ込んでしまつた。

お爺さんは此れは失敗つたと、また其の後を追つかけて鼠の穴の中へ這入り込んで行くと、暗い穴の中が俄かにパッと明るくなつたので、よく見ると、奇麗な家が何軒も何軒も並んだ御殿のやうな所だつた。それでお爺さんは呆れてぼんやり立つて居ると、やがて大勢の奇麗な女の衆が出て來て、お爺さんよう來て呉れました、サァ此方へ　と云つて奥の方へ連れて行つて、お茶やお菓子やお酒を出して大へんに御馳走をして呉れた。お爺さんは喜んで夢中になつて居ると、臺所の方で餅を搗く杵の音が聞えて來る。そうして

一升搗いちやあ五合搗いちやあ
雌猫や雄猫に知らせんな

と鼠たちの餅搗きの唄が聞えて來る。お爺さんは、扨ては此所が話に聞いた鼠の御殿と云ふ所だな、ちよつと脅かしてやれ　と、よせばよいのにお爺さんが、ニャーゴ　と一と聲、猫の啼き聲をすると、ソレ猫が來た、逃げろ〳〵と、今迄明るかつた部屋が急に眞暗くなり、家中が上を下への大混雜になつてしまつた。お爺さんは、コリャ困つたもんだ　と手探りでやつとこさ穴の中を這ひ出すと、丁度其處が自分の家の椽の下だつた。

そんな事とも知らん婆さんは、今しがた臺所で大事な鰹節を猫に盗まれて怒つて居ると、椽の下の方で猫の啼き聲が聞えた。彼奴だな、と婆さんは天秤棒を持つて來て、ヒョコッとし出たお爺さんの禿げた頭をコキン　とぶん撲つた。お爺さんは眼から火の出る位ひどく頭を叩かれて、アタッ　と大きな聲を出したら眼が醒めた、今のは皆夢だつた。

鍬を忘れた嘉兵衛の話

むかし或る所に嘉兵衛と云ふ百姓があつた。ある日頬冠りをして畑作りに行く途中で、向ふの森に烏が何羽も居つて、カヘイ　カヘイ　と啼いて居る。嘉兵衛は腹を立てゝ、何だ、烏奴、人を馬鹿にせんな　と云ひながら、石をぶつ付けて置いて行くと、烏は餘計に大きな聲をして、カヘイクワハ　カヘイクワハ　と啼いて居る。

嘉兵衛が畑へ行つて、さて畑を作らつとしたら鍬がない。こいつはしまつた、烏奴、俺が鍬を忘れたんで、それで彼んな事を云つて啼いたんだな、此りやあ困つたぞ、と向ふの森の方を見ると

先刻の烏が今度は、アホー　アホー　と啼きながら、嘉兵衛の頭の上へ糞をひつて置いて、何處かへ舞つて行つた。

粗そう惣兵衛

或る所に惣兵衛と云ふ名前の、とても粗そつかしい男があつた。秋になつたので、一つ權現樣へお參りに行つて來ずと思つて、嬶樣に、明日權現樣へ行つて來るで、今夜の中に辨當を拵へて枕許に置いてくりやう　と云つて置いて寢てしまつた。

明くる朝、惣兵衛はまだ暗いうちに起きて、枕許を搜すと、昨夜嬶樣に賴んで置いた辨當がちやんと置いてある。よし來た　と其の辨當箱を側に在つた風呂敷に包んで首へ繫り付け、草鞋を穿いて出かけて行つた。

丁度その日はお山はお九日で大へんな人出だつた。惣兵衛は良い氣持でお山へ登つて神樣へお參りした。お賽錢を上げずと思つて財布の中から一文出し、お賽錢函の中へポーンと拋つたら、ガチャ〳〵と大きな音がした。氣が付いて見たら一文の方は固く手へ握つて居つて、片方の財布

の方を間違つて財布さらお賽錢函へ抛つてしまつたのだつた。
いま〳〵しいと惣兵衛は腹を立て、お晝飯でも食べずと思つて石の上へ腰を掛け、首へ縛つて來た辯當箱を下して解いて見たら、辨當箱だと思つたのは自分の枕で、それを包んだ風呂敷は嬶樣の腰卷だつた。
惣兵衛は怒つて谷底へそれを抛つて終つたが、業がわいて業がわいて仕樣がない。急いで山から下りて來て家へ入るが早いか嬶樣の頭を二つ三つぶん撲つた。アレ惣兵衛さ、お前何をするのと云ふ聲を聞いてよく見たら、其處はお隣りで、そのお隣のお神さんを叩いたのだつた。これはしまつたと周章て其處を飛び出すと、俄かに夕立樣がゴロ〳〵と鳴り出した。急いで自分の家へ飛び込んだ惣兵衛は、俄かに顏色を變へて外へ飛び出して來て、大變だ〳〵、うちの嬶樣が首を切られて居る　と呼ばつた。それで近所の人が大勢集つて家へ入つて見ると、惣兵衛の嬶樣は夕立樣が怖いので、布團の中へ首だけ突き込んで震へて寢て居つたのだつた。それを見た皆の衆は成る程粗そう惣兵衛に違ひない、と云つて笑ゐて歸つて行つた。

和尙樣と燒き餅

むかし昔山寺に和尙樣があつた。その和尙樣は大へんにお燒きの好きな和尙樣だつた。毎日〳〵お小僧にかくして一人きりでお燒きを食べとるもんで、お小僧はいま〳〵しい和尙樣だと思つて居つた。和尙樣はお小僧が居つちやあ氣樂にお燒きが食べれんもんで、或る日、小僧小僧　今日は何處其處に建築があるで行つて見て來い　と云ひつけた。お小僧は、和尙樣は俺が居ると邪魔だもんで、建築を見に行つて來いなんて云ふんだ、よし〳〵今日はひとつ和尙樣を困らしてやりませう　と、お小僧は建築を見に行くやうなふりをしてお寺を出かけた。
和尙樣はお小僧が居らんやうになつたので、大きなお燒きを幾つも拵へてそれを圍爐裡ばたへ並べて燒いて居つた。お小僧はもういゝ時分だと思つて、ハイ和尙樣、行つてまいりました　と云つて歸つて來た。まだなか〳〵歸らんと思つて居つた和尙樣はびつくりして、あわてゝお燒きを灰の中へ埋けて知らん顏をして居つた。小僧か、大へんに早かつたな、して建築の樣子はどうだつた　と聞くと、ハイ和尙樣、なか〳〵大きな家で、先づ此處に斯う柱が一本　と云ひながら、お小僧は火箸を持つてお燒きの埋けてある上へ、柱を建てる眞似をしてずぼつとくすぐ、そして

火箸を上げると其の先きへ和尚様のお焼きがくすがつて來る。おつと此れは御馳走さま　さて其の柱の横には床の間があつて、其の柱が又立派な柱で　と又火箸をお焼きの上へくすぐ、そうして和尚様が食べずと思つて居つたお焼きを、とう〳〵お小僧がみんなほぢくり出して食べてしまつた。

西行様の旅

其の一

むかし西行様が旅僧になつて方々旅をして歩いた。だん〳〵行くと向ふの方に大きな家があつたもんで、西行様は其處へ行つて、戸間口へ立つてお經を讀んで居つた。丁度その家では其の時お焼きを焼いて皆で食べて居る所だつた。見ると穢い坊様が立つて居るので、その家のお神さんはあんた坊様にお焼きを一つやるのは勿體ないと、そをつと半分こわつて懐の中へ入れて、殘りの半分だけ持つて行つて坊様にやつた。そうすると西行様は其の半分のお焼きを貰つて

もち月に片われ月はなきものを

と歌をよんだ。すると其のお神さんが

雲にかくれて此所に半分

と云つて、懐の中から殘りの半分を出して西行様にやつた。

其の二

或る日西行様が道を歩いて居ると、おばゝが出たくなつた。それで人の見とらん石垣の下へ行つておばゝをひつた。ひつてしまつてから後を見ると、そのおばゝがもよ〳〵と動く、よく見ると亀が其の石かけの下で日向ぼつこをして居つた上へ、西行様がおばゝをひつたもんで、亀は背中が急によもたくなつたので、びつくりして歩き出したのだつた。西行様はそれを見て

西行も幾く世の旅はして見たが
くそに四つ足これぞ初めて

と云ふ歌を詠んだ。

又その次ぎの日に西行様が旅をして行くと、又おばゝが出たくなつたので、今度は山の中へ入つておばゝをした。してしまつて立つと、萩の木の枝がびいんとはねて、おばゝが西行様の頭へか

ゝつた西行樣はおばゝをする時に、知らずに萩の枝を踏み曲げて、その上へおばゝをしたのだつた。そこで又歌を詠んだ

西行も幾く世の旅はして見たが
萩にはねぐそこれぞ初めて

ソクヘイタンの話

昔一人の旅のお侍樣が日の暮れ方に村へ來て、百姓の家へ今夜一晩泊めて下さいと頼んだ。その百姓の家では、わしの家は貧乏で泊めて上げたくても泊めては上げれんが、此の向ふに一軒のお寺があります　化け物が出るとか云つて住む人がなく、空き家になつて居りますで其處へ行つてお泊りなんしよ　と敎えて吳れた。お侍樣はそれを聞いて、それでは私が今夜そのお寺へ泊つて化け物の正體を見屆けてあげませう　とお侍樣は一人でそのお寺へ行つて、今に何か出て來るかと思つて待つて居つた。夜がだん〳〵に更けて來たと思ふ時分に、東の方から大きな光り物が、テカアン〳〵と光つて來てお寺の椽側へドタンと下りた、そして『ソクヘイタンは居るか』と云ふ。お侍樣が家の中で『そう云ふ手前は何物だ』と云ふと、その光り物が『東原の馬頭』と云ふ。『東はひがし、原ははら、馬頭とは馬の頭の化けた物だ、そんな物に怖いやうな俺ではない、歸れ〳〵』とお侍樣が云ふと、其の光り物が又テカアン〳〵と光つて行つてしまつた。

すると今度は西の方から又光り物が、テカアン〳〵と光つて來てお寺の椽側へ下りて『ソクヘイタンは居るか』と云ふ。『そう云ふ手前は何物だ』と云ふと『西竹林のサイヂョッケイ』『西はにし、竹林とは竹の林、サイジョッケイとは鷄の足の化けた奴だ、そんな物に怖い俺ではない、歸れ〳〵』そう云ふと其の光り物は又テカアン〳〵と光つて行つてしまつた。

すると今度は南の方から火の王がテカアン〳〵と光つて來て、椽側へドタンと下りて『ソクヘイタンは居るか』『そう云ふ手前は何物だ』『南海の大魚』『南はみなみ　海はうみ、大魚とは大きな魚の化けた奴だ、そんな物に怖い俺ではない、歸れ〳〵』又テカアン〳〵と光つて歸つて行つた。

そうすると今度は北の方から又光り物が、テカアン〳〵と光つて來て椽側へドタンと下りて『ソクヘイタンは居るか』『そう云ふ手前は何物だ』『北池の墓』『北はきた、池はいけ、墓とは蛙の化けた物だ、そんな物に怖い俺ではない、歸れ〳〵』またテカアン〳〵と光つて行つてしまつた。もうそれつきりで後は何も出て來なんだ。明くる朝になつてお侍樣は、何か此のお寺の中に化け

物が呼びに來た物が居るに違ひないと捜して見たら、椽の下に古下駄の緒の切れたのが片方あつた。ソクヘイタンと云ふのは此奴に違ひないと、それを焼いちまつたらそれからは化け物は出んやうになつた。

山寺の坊樣ズイトンの話

昔或る山寺に隨頓と云ふ坊樣があつた。その坊樣を狸が毎晩のやうにかまひに來る。夜になつて坊樣が寢ずと思つて居ると、雨戸の外で大きな聲で『ズイトン居るか』と呼ぶ。坊樣はそれがいま〳〵しくていま〳〵しくて仕樣がない、どうかして敵を打つてやらずと思つて、ある晩お芋や大根の御馳走を澤山に拵へ、お酒を買つて來て、今夜こそは狸をえらい目に遇はせてやるぞと待つて居つた。そうすると、いつもの時分になつたと思ふ頃、雨戸の外で『ズイトン居るか』と呼ぶ、坊樣は家の中で『ウン居るぞ』と狸に負けんやうな大きな聲で返事をする、『ズイトン居るか』『ウン居るぞ』『ズイトン居るか』『ウン居るぞ』狸も坊樣に負けんやうに大きな聲を出して呼ぶ。坊樣は御馳走を食べてお酒を飲んで元氣をつけて、狸よりもまつと大きい聲で『ウン居るぞ』と云ふ。『ズイトン居るか』『ウン居るぞ』『ズイトン居るか』『ウン居るぞ』

そのうちに狸の方はだん〳〵に元氣が惡るくなつて、聲がだん〳〵小さくなつて行く、『ズイトン居るか』もうひよろ〳〵した樣な聲になると、坊樣の方はお酒を飲んで御馳走を食べて、大きな聲で『ウン居るぞ』（大きな聲）『ズイトン居るか』（小さな聲）『ウン居るぞ』『ズイトン居るか』（次第に小さい弱々しい聲になる）『ウン居るぞ』（だん〳〵大きく力の強い聲を出す）

おしまひに狸の方で『ズイトンぐにや〳〵〳〵』と糸の切れるやうな小さな聲で、もう後が解らんやうになつた。『ウン居るぞ』坊樣の方は家の中で相變らず大きな聲を出して居る。そのうちにもう狸の聲が聞えんやうになつたので、坊樣はしめたと思つて其のまゝぐう〳〵寢てしまつた。明くる朝、早く戸を開けて見ると大きな狸が腹の皮を叩き破つて死んで居つた。

後家のお久さ

春先きの暖い晩に、後家のお久さが用事があつて田圃の土手を行くと、田圃ん中に蛙が大へんに居つて、ゴケ　ゴケ　ゴケ　ゴケ　と口を揃へて鳴いて居る。お久さは怒つて、人を後家だと思

つて馬鹿にせんな、そんな事をこくと、えらい目に合はしてやるぞ、と云つて、一匹の蛙を足で踏み潰したら、オキユー と云つて鳴いた。

法眼様と狐

むかし一人の法眼様があつた。或る日野原を通りかゝると道端に狐が豐寢をして居つた。法眼様は何か悪戯をして見たくなつたんで、狐のお尻へ法螺貝を當てゝブーッと吹いた。すると狐はびつくりして眼を覺まして、丸くなつて山の方へ逃げて行つた。法眼様は、こりやあ面白かつたと思つて居ると、そのうちに今まで明るかつたのが遽かに眞暗くなり、夕立雨がボッン／＼と降つて來た。法眼様は困つて、其處らをうろ／＼して居ると、向ふの方からチンボンガラン チンボンガラン とお葬ひがやつて來た。

法眼様はおつかなくなつて、側の木の枝へ登つて、しつかりとしがみ付いて居ると、お葬ひは其の木の下まで來て、其處へ棺桶を下ろし、提灯の火で棺桶に火を點けて置いて、皆は何處かへ行つてしまつた。法眼様は愈々おつかなくなつて、震へて見て居ると、その中に棺桶がパチンと割れて、中から死人がフラ／＼と立ち上つて、袖や肩の火の子を拂ひながら、アッッボッボ、アッッボッボと云つて法眼様ののして居る木へ登つて來る。法眼様はこりやあたまらんと、だん／＼と上の方へ登つて行つて、一ばんてつぺんの枝につかまつてブル／＼震へて居ると、死人も段々上の方へ登つて來て、今にも法眼様の足に取つ付きそうになつた。法眼様はおつかないので夢中になつて、刀を拔いてスタンと斬り付けた。そうすると死人は火の玉になつてストーンと落ちたかと思ふと、急に方々が明るくなつた。氣が付いて見ると、法眼様は田圃の土手を一つ一つ登つたり下りたりして居つたのだつた。

猿と獺

猿が川端の岩の上へ坐つて、赤い顏をして山の畑から盜んで來た豆を食べて居ると、其所へ獺が河端の芦でこしらへた莫蓙を持つて、水の中から顏を出した。猿は獺の持つて居る莫蓙が欲しくて欲しくてたまらんし。又獺は猿が食べて居る豆が美味さうで欲しくて欲しくてたまらなんだ。そこで猿が獺に『お前は豆つちゆうものを食べた事は無いらが、こんな美味い物は無いぞ、それ

にこの豆の皮を躰に張りつけて水の中を潜つて行つて見よ、そうすると魚がいくらでもとれるにつて、猿はでたるまいの事を教えてやつた。そうすると獺は猿に向つて　猿さん〳〵、お前は木の枝の上にばつか寢とつて、莫蓙を敷いて寢た事は無いら、こりよう敷いて寢て見よ、そりやあいゝ氣持だにつて、そう云つた。そこで猿は　そんならこの豆とその莫蓙と交換ままいかつて云ふと、獺もウム交換む　つちうので、猿は獺の莫蓙をむらひ、獺は猿から豆を貰つて、猿は山へ、獺は川へ歸つて行つた。

山へ歸つて來た猿は、いゝ物を貰つて來たで、これを敷いて今夜は氣持よく寢ずと思つて、高い木の上へ持つて行つて、枝と枝との股ん所へそれを敷いて、その上へ寢つと思ふと、莫蓙だもんでズルーンと滑つて落ちゝまふ。又それを拾つて上つて行つて、敷いて寢つとすると又ズルーンと滑つて落ちゝまふ。一晩中木の上へ上つたり下りたり同じ事を繰り返し〳〵やつとつたが、どうしても滑り落ちてしまつてとう〳〵一と寢入りもせずに夜が明けてしまつた。そこで莫蓙を抱へて昨日の川端へ來て見ると、獺もねぼけた樣な顏をして來とつて　ヤア猿さん昨夜はどうだつた　と聞いたので、猿は頭を搔き〳〵　木の股で寢つと思やあ滑り落ち、拾つて上つて行つて寢つと思やア滑り落ち、とう〳〵一晩中眠れずにしまつたわ　と云つて　お前の方はどうだつた

ときいたら獺は　おれもえらい目にあつちまつた、豆は食べれず、豆の皮を張つて水潜りをして見ても魚は一寸もとれず、一晩中水潜りばつかして居つて、こんなつまらん事は無かつた　と云つた。そこで猿は　こんな莫蓙は要らんでお前に返やすつて云ふと獺も　俺も豆はお前に返すよつて云つて、猿は又豆を持つて山へ歸り、獺は莫蓙をかぶつてドボンと水ん中へ潜つて行つたつて。

甘酒の好きな和尙さま

昔或る所にお寺があつた。其處の和尙樣はとても甘酒がすきで、しわん坊で、他人にはちよつともやらず、自分一人切りで飲んでは喜んで居つた。

お小僧はそれがいま〳〵しくて〳〵仕樣がない。何時か和尙さまのすきに一寸でもいゝで飲んで見たひと思つて居る中に、或る日のこと、和尙樣はお隣村まで御法事に行つて留守になつた。御小僧はシメ〳〵と喜んで、和尙樣の部屋に忍び込んで甘酒を探しまわる中に、押入れん中に甘酒の入れ物を見付け出した。

お小僧は、初めほんのちよつと飲む心算で、チョビ〳〵なめて居る中に、どうも美味くて仕樣

がない。もう一寸、もう一寸と、云つて居るうちに、とう〳〵みんな飲んでしまつた。こりやあしまつたと思つたがもう仕様がない。和尚様が歸つたらどんねに叱られるか知らんと、心配してウロ〳〵して居る中に、御本尊様の金佛に目が着いた。お小僧は俄かにニコ〳〵し出して、先刻の甘酒のかすを指の先きへ付けて來て、金佛様のロべたにベタ〳〵塗り付けて置いて、知らん顔をして自分の部屋へ來てお經を讀んで居つた。外の方で和尚様の足音が聞えると、一寸覗いて見て赤い舌をペロンと出して、又大きな聲でお經を讀んで居つた。

其の中に和尚様が歸つて來た。そうしてすぐ甘酒を飲まつとして見ると、入れ物は空つぽになつて一寸もない。こりやきつとお小僧奴が飲んでしまつたに相違ないと、眞赤になつておこり、頭から湯氣をボッボッと立てながら大きな聲で　コラ小僧、手前は俺の甘酒をみんな飲んじまつたな　と云つて叱つた。するとお小僧は何にも知らん様な顏をして出て來て、イヽエわしは何も知らんが、和尚様の大事な甘酒がありませんて、そりや不思議だ、さう言やあ先刻本堂の方で變な音がしたやうだつた　と云ふ。どんな音がした　と聞くと、何か飲む時のやうな音がして居つたで、事によると本尊様が飲んだんじやありませんか　と、さも本當らしくに言ふので、和尚様も本氣になり、二人で本尊様の側へ行つて見ると、ほんに口端へ甘酒が一つぱい着いて居る

ので、和尚様は益々怒つて、毎日〳〵お經をあげて拜んでやるのに、人の大事な甘酒を盜んで飲むとはふとゞきな奴だ　と、庭から割木を持つて來て、本尊様をなぐり付けると本尊様は、クワン〳〵〳〵（食はん）と云ふ。和尚様はお小僧をつらまへて　コラ小僧、本尊様は食わん食わんと云ふじやあないか、嘘こき奴　と、叱り付けた。するとお小僧は　和尚さま、和尚さま、わしは知らんが、そんなら大釜で煮て御覽なんしよ　と云ふ。其處で今度は大釜に湯を一ぱい入れて沸へ立たして、二人で本尊様をエッサ〳〵と運んで行つて、釜ん内へ入れて煮たら、クッタクッタクッタクッタ（食ッた食ッた）と言つた。

節の穴と火伏せのお札

むかし山家の馬鹿な聟様が里の方から嫁様を貰つた。或る日その父親が其の聟様を連れて嫁の家へ行く事になつたが、馬鹿な聟様だもんで父親は心配して、先方の家の座敷へ坐つて、若し柱に節の穴でもあつたら、その穴の所へ火伏せのお札を貼つたらいゝに　と云ふやうにと敎えて連れて行つた。

さて愈々嫁の家へ着いて座敷へ通ると、丁度床の間の柱に節の穴のあるのが見付かつた。聟樣は家で教はつたのは此所だと思つて　彼の穴の所へ火伏せのお札を貼つたらいゝに　と云つたので此れは悧巧な聟樣だと云つて皆に大へんに賞められた。

いろ〳〵御馳走になつて家へ歸ると云ふと、嫁の家の方では聟樣のお歸りだと云つて、馬で送つて呉れた。　その途中で聟樣は馬の目の所を指して、　此の穴の所へも火伏せのお札を貼るといゝに　と云つたので　とう〳〵化けの皮があらはれて、矢つ張り馬鹿聟樣だと云つて笑らはれた。

ウントコショの話

山家の聟殿が或る時嫁の里へお客によばれた。聟殿が行くと嫁の家ではよう來て呉れたと云つて大へん喜んで、お團子を拵へて御馳走にして呉れた。そのお團子が大へん美味しかつたので、聟殿は家へ歸つたらそれを拵へて貰はつと思つて其の名を教はり、家へ歸る途々口の中でダンゴダンゴと繰り返へしながら歸つて來た。そうすると途中に川があつて其處に橋がなかつたもんで、聟殿はウントコショと掛け聲をして其の川を飛び越した。その拍子に折角今まで口の中で云つて來たお團子の名をけつこう忘れてしまつた。さあ困つた、何だつたか、と聟殿は一生懸命考へて居るうちに、そう〳〵ウントコショだ、と氣が付いて、それから口の中でウントコショ、ウントコショと繰り返へしながら家へ歸つて來て嬶樣に、今日お前の家へ行つたらウントコショつちゆう物を拵へて呉れた、大へんうまかつたでそれを拵へてくりようと云ふ。嬶樣はそんなウントコショなんちゆう物は聞いた事がないで出來ん　と云ふと、手前の家で拵へて呉れた物を知らんちゆう譯があるか　と怒つて火吹竹で嬶樣の額をパーンとたゝいたら、嬶樣の額へ大きな瘤が出來た。すると嬶樣はそれを撫ぜながら、こんなお團子見たいな瘤が出來たと云つて泣いた。それを聞いた聟殿はやつと思ひ出して、うん其のダンゴよ、と云つた。

猿の聟殿

むかし昔一人の百姓が山の中の畑作りに行つた。畑を作りながら獨語のやうに、誰でも此の畑をみんな作つて呉れたら娘を嫁にやるがなあ　と云つた。そうすると、山の方から猿が一匹出て來て、その猿が見て居るうちに其の畑をみんな作つてしまつた、そうしてその百姓に約束通り娘を

俺れにお呉れ　と云ふ。百姓は困つた事になつたと思つたけれど、仕樣がないもんで、そいちやあ明日の朝俺の家まで來い　と云つて返事をした。

百姓は家へ歸つて來ても、明日猿が來たらどうせずか知らんと、一人で心配して居つた。そうすると三人の娘のうちの總領の娘が來て、お父さんはどうしてそんな顏をして居るのか、と聞く、それで實は斯う〳〵斯う云ふ譯で、娘を猿にやる約束をしてしまつた、猿が明日の朝娘を貰ひに來るので困つて居る所だ、氣の毒だがお前猿の所へ嫁に行つては來れんか、と云ふ。いやな事だ猿の嫁になんか誰が行く者か、と云つて總領の娘は怒つて行つてしまつた。

又二番目の娘が來たので、猿の嫁に行つて呉れんか、と賴むと、これも怒つて行つてしまつた。終いに三番目の娘が來て、お父さんどうしてそんな困つたやうな顏をして居るのか、と聞くので又其の話をすると、そいちやあわしが其の猿の所へお嫁に行つてあげず　と云ふ。百姓はそれを聞いて大へんに喜んで居ると、次ぎの朝、其の猿はもうちやんと聟樣になつてやつて來た。三番目の娘は、お父さん、大きな瓢簞を一つおくんな　と云つて、其の大きな瓢簞を猿の聟殿に持たせて、山の方へ一緒に上つて行つた。だん〳〵行くうちに、大きな川があつて深い淵になつて居つた。娘は猿に其の瓢簞を淵ん中へ沈めて貰ひたいと云つた、猿は大事な嫁樣の云ふ事だもんですぐに承知して、其の瓢簞を抱へて淵ん中へ入つて行つた。そうして一生懸命になつて其れを沈めつとするが、沈めりやあ浮き、沈めりやあ浮き、いくら沈めつと思つても沈めれなんで困つて居る所へ、娘が山から大きな石を轉らしてよこしたので、猿はとう〳〵淵ん中で死んでしまつた。聟殿が死んでしまつたので娘は又自分の家へ歸つて來た。

仁王樣の夜遊び

立て石に立石寺と云ふお寺があるが、其處のお寺の仁王樣は、朝から晩まで仁王門の中に立つてばつか居るので退屈で退屈でたまらん。晝間は人に見られるでよくないが、夜くらひはちつとは遊んで歩いたつて惡かあないら、と云ふわけで、其の晩から仁王樣が夜遊びに出かけた。初のうちはお寺の近所をぶら〳〵して居つたが、そのうちにだん〳〵と遠く、人家のある方へまで遊びに行くやうになつた。

或る夜の事、仁王樣はいつもの通り門の中から抜け出して、村の方へぶら〳〵とやつて來ると、

一軒の家から明りが射して居る。そうつと側へ寄つて障子の穴から覗いて見ると、一人のお婆さんが糸車でブンブンブンブンと糸を繰つて居る。仁王様は初めてそんな所を見て珍らしいもんで一生懸命に覗いて居ると、そのうちにお婆さんが大きなお屁を一つブーッと放つた。それが餘り可笑しかつたので、外の仁王様が思はずクス〳〵笑つたら、其の聲を聞いてお婆さんは、誰か村の若い衆でも居つたのかと思つて　匂ふか　と聞いた。吃驚したのは仁王様で『仁王か』と云ふ所を見ると、俺が此所に隠れて居る事をちやんと見透したに違ひない。怖ろしい婆さんもあるものだと、急いで逃げて歸つて來て、もとの通り門の中へ入つて知らん顔をして居つた。

鼠の嫁入り

ある所に親娘三人の鼠が住んで居つた。親たちは娘が大きくなつたもんで、何所かへ嫁らせつと思つたが、鼠の仲間にはちようきゆうな奴は居らんので、もつと豪い所へ嫁らせつと思つて、何處がいゝか知らん、と、親たちが相談をして居つた。マア此の世の中ではお天とう様が一番豪いで、彼處へ嫁らせるか　と云つた。そのうちに雲が出て來て俄にお天とう様を隠してしまつたので、一番豪いと思つて居つたお天とう様の邪魔をする位だから雲の方がまつと豪いに違いない、其處へやるか　と云つた。そのうちに風が吹いて來て雲を何所かへ吹き飛ばしてしまつたのを見て、こりやあ雲よりも風の方が豪いかな、と思つて居ると、その風が向ふの方の壁へ突き當つて屁古垂れてしまつた。そいぢやあ彼の壁が世界中で一番豪いのかと思つて見て居ると、その壁へ穴を明けて一匹の鼠がチョロ〳〵と出て來た。風を負かすやうな此の豪い壁へ穴を明ける所を見ると、そいぢやあ矢つ張り鼠が一番豪いのかなあ、と感心して、とう〳〵娘を仲間の鼠の所へ嫁らせる事にした。

小僧イ、カンの話

むかし山寺に和尚様があつた。お酒が好きで、毎晩お小僧には内緒でお酒を沸かして飲んで居つた。お酒のお燗がつくと　アァいゝ燗だなあ　と云ふのが和尚様の何時もの癖だつた。お小僧は、いま〳〵しい和尚様だ、自分一人つきりで美味いお酒を飲んで、自分には一寸も呉れん、ひとつ和尚様を困らしてやりましやうと思つて、或る日、和尚様　和尚様　わたしの今まで

の名前はどうも面白くないで、名前を替へてむらい申したい　と云ふ。何と云ふ名にすりやあいゝかと聞くと、イイカンと云ふ名にして下さい　と云ふ。イイカンとは妙な名前だと和尚樣は思つたけれど、お小僧が何でもそう云ふもんで　よし〳〵それぢやあ此れからイイカンと呼ぶやうにせず　と云つた。お小僧は占めたと思つたが、そんな顏はせずに　有難う御座いました　とお禮を云つた。

お小僧は今に和尚樣を困らしてやらずと思つて待つて居ると、そのうちに日が暮れて、和尚樣は又奥の座敷の方でお酒を沸かして居る樣子であつた。お小僧はそをつと和尚樣の居る部屋の襖の外へ坐つて待つて居ると、そんな事とは知らん和尚樣は、お酒のお燗がついたので、徳利を取り出してお盃へ注いで、一と口飲んでァ、いゝ燗だ　と獨りごとを云つた。それを襖の外に居つて聞いたお小僧は、戸をさらつと開けて　ハイ和尚樣　お呼びになりましたか　と顏を出した。和尚樣はまづい所を小僧に見付けられて　オ、小僧か、別に用事はないが、まあ一杯飲め　と云つてお小僧にも一ぱいお酒を飲まして呉れた。

裸重兵衛

川路村に昔重兵衛さと云ふ人があつた。博奕が好きで、その癖いつも負けて、着物を取られて裸でばつかり居るので、皆は裸重兵衛さと呼ばつて居つた。

その重兵衛さが、今夜も博奕に負けて裸で歸つて來ると、田圃ん中で蛙が　ハダカダ　ハダカダ　と　鳴いて居る。重兵衛さは怒つて、此奴め、人を馬鹿にせんな　と云つて、一匹の蛙を力一ぱい踏み付けたら　ジューベー　と云つて鳴いた。

づくなし男

むかしある所にづくなしの男があつた。お神さんにお握飯を拵へて其れを首へ縛り付けて貰つて懐手をして町へ用達しに出かけた。お晝時分になつてお腹がへつて來たけれど、づくがないもんで自分でお握飯を首から取る事がいやで、誰か來たら取つて貰はずと思つて、そのまゝ向ふの方へ行くと、向ふから大きな口を開いた男が來る。あんねに口を開いて居る所を見ると餘つぽどお

腹が空いて居るに違いない。あの人をたのんでお握飯を取つて貰ひませうと　もし〳〵　わしはお握飯を首に結び付けて居るが、手を出して其れを解くづくがない　お前さんがそれを取つて呉れたら半分だけ分けてあげず　と云ふ。すると口を開いた男が云ふ事に　わしはさつきから笠の紐が解けて困つて居るが、それを結ぶづくがないので、誰かに結んで貰はずと思つて、斯うして口を開いて笠が落ちんやうにして居る所だ　と云つた。

山寺の和尚とチンセイ糖

昔山寺に和尚樣があつた。その和尚樣が金平糖を買つて來て、それを壺の中へ藏つて置いて、自分一人でおいしさうに食べて、お小僧には一つもやらなんだ。お小僧が或る日和尚樣の部屋を覗いて見ると、和尚樣は一人でおいしさうに金平糖を食べて居る。お小僧は知らんやうな顏をして其の次ぎの朝、和尚樣の部屋のお掃除をすると云つて、わざと金平糖の入つて居る壺をひつくり返へした。壺の中から澤山の金平糖がガランとあかつたのを見て　和尚樣　和尚樣　此れは何だります　と聞いた。和尚樣は小僧に見付かつて此れはしまつたと思つたが　小僧小僧　それはチンセイトウと云つて大へんに毒の物で、ちよつと食べても命が無くなる位なもんだ、拾つて壺の中へ入れたら、あとで井戸側へ行つて手をよく洗つて置かんといかんぞ　とうまく誤間化した。お小僧はたゞ　ハイ〳〵　と云つて手を洗つてすまして居つた。

或る日和尚樣が御法事があつて在の方へ行つた留守に、お小僧は和尚樣の部屋へ入つて行つて、壺の中から金平糖を出して一つ食べて見ると、頰たねが落ちる程おいしい。もう一つ、もう一つと食べて居るうちにとう〳〵皆食べてしまつた。お小僧は和尚樣が歸つて來たら大へんに叱られると思つて困つて居つたが、そのうちに和尚樣が大事にして居たお皿を一枚こわつて置いて、布團を被つて寢てしまつた。

お和尚樣が歸つて來て見ると、お小僧が布團を被つてウン〳〵うなつて寢て居る。小僧小僧　どうした　と聞くと　和尚樣和尚樣　申し譯のない事を致しました、私は和尚樣のお留守にお部屋の掃除をせつと思つて、つひそゝうして和尚樣の大事なお皿を一枚こわりました。申し譯がないから死にたいと思ひまして、こないだ和尚樣が大へんに毒な物だと敎えて下さつたチンセイトウを食べて、今に死ねるかと思つて寢て居る所であります　と云つた。

山家の聟殿

山家の聟殿が嫁の家へ行つた。嫁の家では聟殿が來たと云つていろ〳〵な御馳走を拵へて呉れた聟殿が見て居ると向ふの方で家の衆が何か拵へて居る、子供が其處へ行つてそれを欲しがると、それは怖い物だで食べれん　と云つて脅かして居る。聟殿はそれを見てそんな怖い物を拵へて何にするかと思つて居ると、そのうちに聟殿の前へそれを持つて來て　何にもないがサァおあがりなんしよ　と云ふ。聟殿はおつかなくなつて、お腹が一ばいで食べれん　と云ふと　折角拵へた物だに、食べれにやあ仕樣がない、それでは家へ持つて行つて嫁にやつておくんな　と云つて、其の御馳走を重箱へ入れて、風呂敷へ包んで持たして呉れた。

聟殿はこりや困つたと思つて、おつかなびつくり其の風呂敷の重箱を下げて出て來たが、今にもお化けが出そうで怖くて〳〵仕樣がない。向ふの方を見ると、いゝあんばいに長い物乾竿が一本あつた。聟殿は早速その物乾竿を外して來て、そのうらんぼへ風呂敷包みを引つ掛け、それを擔いでやつと安心しながら家の方へ歸つて行つた。そのうちに竿の先きの重箱が竿を滑つてする〳〵する〳〵つと落ちて來て、聟殿の首の所へこつんと當つた。聟殿はびつくりして、それお化

けが飛び付いた　と、其の竿を放り出して置いて、丸くなつて家へ逃げて來た。

家の人たちは聟殿の樣子がどうも變なので、聞いて見ると、これ〳〵こう云ふ譯で、お化けが飛び付いて來たと云ふ。家の衆は其んな筈はないと思つて、聟殿が竿を放り出して置いた所へ行つて見ると、畑の中に、綺麗な風呂敷に包まれたお重の中に、美味そうな御馳走が一ばいにはいつて居つた。

山猫と獵師

むかし山奥の一軒屋に獵師があつて、母親と二人きりで暮して居つた。その獵師の家へ一匹の可愛らしい猫が何處からか來たので、獵師の母親は大へんに喜んで大事に飼つて居つた。その猫は本當は山猫の化けたのだつた。其の時分、其の山の中には澤山の山猫が居つて、いろ〳〵な業をすると云つて村の人たちは皆怖がつて居つた。獵師はそんな惡い事をする山猫なら俺が鐵砲で擊ち殺してやりましようと、或る日圍爐裡端で山猫を擊ちに行く鐵砲丸を拵らへて居つた。すると家の猫がその獵師の側へ來てじつと丸を拵へる所を見て居る。その樣子がどうも獵師の拵へる丸

の數を一つ二つと勘定でもして居る樣に見えるので、獵師はおかしな猫だと思ひながら、何か心に思ひ當たる事があつたと見えて、猫の見て居る所で十二の丸を拵へて、その他に一つ金の丸を猫に知れんやうに用意して持つて行つた。どんな獵師でも愈々と云ふ時には此の金の丸を擊つものだつた。

獵師は十二の丸と、その金の丸とを持つて、鐵砲を擔いで山の奥の方へ入つて行つた。そのうちに日が暮れたので、いつも寢る小屋へ入つて休んで居ると、夜半頃にその小屋の近くへ鹿物が寄つて來たやうな氣がした。そこで獵師は鐵砲を持つて小屋からそをつと外の樣子を見ると、まつ暗い中に二つの眼がちか〳〵光つて、何とも分らん物がだん〳〵に小屋の方へ近寄つて來るのが見えた。獵師は此奴怪しい物だと、早速鐵砲に丸をこめてドーンと擊つてやると、チヤリンと音がして丸は其處へ落ちてしまつたやうだつた。獵師が又擊つてやると、又チヤリンと音がして丸は其處へ落ちてしまつた。いくら丸を擊つても皆チヤリン〳〵と音がして一つも丸が當らない。獵師も此れはと吃驚しながらとう〳〵十二の丸を皆擊つて終つて、あとは金の丸一つだけになつた。獵師は仕方がないので、一ばん終にその金の丸をこめてズドーンと擊つてやると、今度はチヤリンと音はせずに、確かに丸が當つたらしくて、その鹿物は大きな唸り聲をあげて山の奥の方へ逃げて行つた。

獵師は夜の明けるのを待つて、昨夕の所へ行つて見ると、其處に何處かで見た事のあるやうな茶釜の蓋が一枚落ちて居つて、其のそばに十二の丸がころがつて居つた。そうして其處から山奥の方へ血が大へんにこぼれて居るので、だん〳〵其の血の跡をつけて行つて見ると、一匹の大きな山猫が胴を擊ち貫かれて、血だらけになつて死んで居つた。

獵師は急いで自分の家へ歸つて見ると、自分の母親は何かの爲めに喰ひ殺されて、そうして圍爐裡に掛けてあつた茶釜の蓋が何處かへ紛くなつて居つた。それは山猫があたりまへの猫に化けて獵師の家へ來て獵師を殺さつとしたのだつた。それで獵師が山へ出かけた留守に母親を喰ひ殺して置いて、圍爐裡の茶釜の蓋を持つて山へ行つた。そうして獵師の擊つてよこす十二の丸を此の茶釜の蓋で受けて、愈々丸が無くなつた所で獵師を殺さつとしたのに、一ばんおしまひに金の丸を擊つてよこしたので、とう〳〵自分がそれで擊ち殺されたのだつた。

繼つ子とほんの子

むかし繼つ子とほんの子とあつた。繼母は二人を栗拾ひにやつた。繼つ子にはしつた(底)の破れたびくをやり、ほんの子には新しい丈夫なびくをやつた。そして其のびくへ一ぱいづゝ栗を拾つて來いと云つてやつた。二人は山へ行つて、栗を拾つてはびくへ入れ、拾つてはびくへ入れて居るうちに、ほんの子の方はいゝびくだもんで、ちきに一ぱいになつた、それで先きへ家へ歸つてしまつた。繼つ子の方はいくら拾つても拾つても、びくが破れて居るもんで、一寸も一ぱいにならなんだ。そのうちに日が暮れてしまつた。繼つ子は悲しくなつて泣きながら向ふの方を見ると火が見えたので、其の方へ行つて見ると一軒の家があつて、其處に婆樣が一人で糸をとつて居つた。繼つ子は其の婆樣に譯を話して泊めて貰はつとしたら、婆樣の云ふ事に、此處は鬼の住み家で、今は皆山へ行つて居るが、おつつけ歸つて來る、歸つて來て見付かれば直ぐに食べられて終ふで、此れを被つて庭の隅つこに隠れておゐなんしよ　と云つて隠れ簑と隠れ笠とを與れた。娘は其れを貰つて庭の隅に隠れて居ると、其のうちに山の方からガヤ〳〵云つて大勢の鬼たちが歸つて來た。そうして家の中へ入ると直ぐに　あゝ人臭い、人臭い、婆樣、誰か人が來りやあせんか、あゝ人臭い、人臭い　と云つて、家ぢゆうを搜して歩いた。娘は隠れ簑と隠れ笠を被つて隠れて居つたもんで、とう〳〵目っからずに居つた。婆樣は、何で人や何か來るもんけ、それより

か今夜はもう遲いし、おつつけ一番鷄の啼く時刻だで早く寢よ　と云つて寢床の中へ鬼たちを追つてやつた。

其のすきに婆樣は娘に早く逃げるやうにと敎えてやつたので、娘は其の隠れ簑と隠れ笠を被つて家を逃げ出した。そうしてとう〳〵命からがら家まで逃げて來た。お殿樣は繼つ子の娘が隠れ簑と隠れ笠と云ふ珍らしい寶物を持つて來たと云ふので、娘を御殿へ招ばつて大へんに賞めて、娘はお殿樣からいろ〳〵な御褒美を澤山に貰ひ申したと云ふ話だ。

和尙樣と八の嬶樣

むかし〳〵或るお寺に和尙樣とお小僧とが居つた。和尙樣は毎日〳〵お隣の八の嬶の所ばつかりへ行つてお寺には一寸も居らず、いつもお小僧が一人つきりで留守居をして居るので、お小僧はごうが沸いてごうが沸いて堪らなんだ。それで或る日の事、和尙樣が八の嬶程大事にして居る金唐屏風に、一二三四五六七八九十　と眞つ黑く大きな字を書いて置いて知らん顏をして居つた。和尙樣が八の嬶の所から歸つて來て見ると、自分の大事な大事な屏風に金釘を曲げたやうな下手

な字で　一二三四　と書いてあるので、怒つたの怒らんの、こんな悪戯をしたのは小僧に違ひないと　コラ小僧　何故こんな悪戯をした　と怒鳴りつけた。そうするとお小僧は平氣な顏をして笑つて居るので、和尚樣は餘計に怒つて　何でこんな事をした、早く云つて見よ　と云ふ。そこでお小僧は　和尚樣　和尚樣　そんねに怒らずに、それを判じて御覽なんしよ　と云ふ。何、判じよだ、馬鹿奴、一二三四が何だ、それを判じて何になる　と和尚樣は眞赤になつて怒る。お小僧はそれでは私が判じて見ます、いゝかな、一々二　三善もない四案して　五にんたんにかゝわらず　六道の道を忘れ　七條の袈裟を掛けながら　八の嬶を盗んで九勞(苦勞)する十寺(住寺)いかゞ　斯う判じたらどうであります　とお小僧に云はれて、和尚樣は一言もなく頭を掻き　小僧小僧　降參したわ　と云つて自分は隱居して、お寺をお小僧に讓つてやつた。

鼠と和尚樣

昔或るお寺の和尚樣の處へ鼠がお風呂桶を借りに來た。和尚樣　どうかお風呂桶を貸しておくんなんしよ　と云ふので　ヤレお安い事だ　と云つて心よく貸してやつた。暫くすると　和尚樣、

お湯が沸いたで來てお入りな　と鼠が呼びに來て呉れた。　そりやあおかたしけ　と云つて、和尚樣は鼠の家へお風呂貰ひに行つた。

お風呂に入つて居ると鼠達が向ふの方で唐臼を挽く音が聞えて來る。

今年しや嬉しや猫の聲や聞かん　ガタスト　ガタスト

と唄ひながら臼を挽いて居る。それを聞いてお和尚樣は　こりや面白い、一つ鼠を驚かしてやらず　と思つて、よせばいゝのにニャーゴと猫の眞似をして見た。そうすると俄かに　ガタ〳〵　チュー〳〵　と家中が大騒ぎになつてしまつたので、和尚樣もびつくりしてお風呂から飛び出し着物を抱へてお寺へ逃げて歸つた。そうしてよく見ると大事な褌を鼠の家へ忘れて置いて來た、今更頭を下げて貰ひにやあ行けず、和尚樣も大損をこいた。

藥賣りと狐の話

ある日、ひとりの藥賣りが、眞夏の日盛りに廣い原の一本道を歩いて居つた。原の眞中に大きい堤があつて、そのそばに大きな樹が一本、涼しかりさうな日蔭をつくつて居つた。あんまり暑くて苦しくなつた藥賣は、その木の蔭で休まつと思つて近づいて見ると、其處に狐が一匹畫寢をして居つた。あ、こんな場に狐が寢て居りやがる　おどかしてやれ　と思つて、ソーッと近寄つて行つて、だしぬけに　ワァッ　と云ふと、狐はびつくらして　キャーンと飛び上つた拍子に堤の中へチャブーンと落ち込み、キャン　キャン　キャーン　と鳴きながら向ふ側へ泳いで行つて、そのまゝ何處へか行つてしまつた。

藥賣は狐のまごついた樣子があんまりおかしかつたもんで、大笑ひをして、その樹の蔭で休んで居つたが、その中にねむたくなつて、ほんのちよつと居眠りをしてしまつた。目をさまして見ると、何時の間にか日が暮れてしまつて　そこらへんが眞暗になつて居つた。こりやあ寢過ぎてしまつたわい、暗くて道もわかりやあせん、困つたなあと、藥賣は足さぐりで歩き出したが、その中に道を間違へてしまつて、兩側に木のぎつしり並んだ細い道へ出てしまつた。その道をせかせか云ひながら歩いて居ると後の方で　チーン　ボーン　チャラーン　とお葬ひの音が聞えて來る。藥賣はおつかなくなつて後を見ることも出來ず、一生懸命に歩いたけれど、お葬の音は、チーン　ボーン　チャラーン　チーン　ボーン　チャラーン　とだん〳〵追ひ着いて來る。ひよつと後を振り向くと、首がなくて、胴体だけの白裝束が幾人も〳〵で棺桶をかついですぐ後まで來

て居つた。藥賣は逃げ場が無いもんで、荷物を放り出して、側にあつた太い樹の一番下の枝までやゝけてのしたが、丁度その時、行列はその樹の下まで來て止つた所だつた。何をするんずらと思つておつかなびつくり見て居ると、その樹の根元へ穴を堀つて、棺桶を埋けてしまひ、土を饅頭のやうに盛り上げて置いて、首の無い白裝束は皆歸つて行つてしまつた。

樹の上の藥賣は　やれ〳〵　これで助かつた　と思つて、そうつと枝から降りつとしたら、下の土饅頭がムクリッ〳〵と動き出した。　あゝこりや困つた　と思つて、枝から降りれずに土饅頭を見て居ると、土饅頭の中から、青いねぶか(葱)のやうな細い手がヒョロンと出て來た。それから頭の髪をおつさらにしたお化けが顔を出して、その細い手をフラフラゆすりながら、　ウワーッ　と藥賣の方へ登つて來たもんで、　ヒャーッ　と云ひながら上の枝まで逃げ上ると、お化けはまた　ウワーッ　て云ひながら追ひ付いて來た。藥賣がだん〳〵上の枝へ、上の枝へと逃げるのを、お化けは同じやうに　ウワーッ　と、やらしい聲を出しちやあ、追ひかけて來るので、とうとう一番上の枝まで逃げ登つた。藥賣りは、もう逃げる所が無くなつてしまつた。それでもお化けは　ウワーッ　て云ひ乍らフラフラッと上つて來るので、藥賣は　ヒャーッ　て云つて、その樹の頂上から無茶苦茶に飛び降りると、ヂヤブーンと音がして水の中へ落ち込んだ。それと一

緒に一面がカラーンと明かるくなつて、おてんと樣は相變らず天のまん中に光つて居つて、まだ夜中でも何でもなかつた。藥賣は、さつき狐の落ち込んだ堤の中へ、狐と同じやうに落ち込んだがアブアブをしながらやつとこさ堤から這ひ上つたさうだ。

聞きちがひ

昔ある所に耳の遠いお爺さんがあつた。そのお爺さんはお豆腐屋をして居つた。或る晩近所の人が豆腐を半丁買ひに來た。

お爺さんお爺さん、豆腐を半丁賣つとくれ　と云ふと、耳の遠いお爺さんは　何、遠くで半鐘が鳴るつて　と云ふ。　さうじやあない豆腐へ　と云ふと耳の遠いお爺さんは　すました顏をして　遠くならいゝわ、と云つた。それでその人はとう〳〵お豆腐を買へずに歸つてしまつた。

蛇と犬とお爺さんの話

或る山奥の村にお爺さんとお婆さんがあつて、お爺さんは獵師をして犬を二匹飼つて居つた。或る日二匹の犬をつれて獲物を探して歩いて居ると、向ふの方で煙が出て火がボー〳〵燃えて居つた。お爺さんは大聲を出して　オーイ、そこで火を焚いちやあいかんぞッ　と呼ばつたが何の返事もない。變に思つて傍まで行つて見ると、誰も居らなんで、かはいさうに蛇が一匹火の中に半焼になつて苦しがつてゐた。情深いお爺さんは大變氣の毒がつて、早速その蛇を助けてやると、蛇は喜んで　命の親だ　と云つて涙をこぼしてお禮を言つた。そして　お禮の印に獸の言葉がわかるやうに教えて上げませう　と言つて、犬の言葉や、猫の言葉や、その外色々の獸の言葉を教えてくれた。そうして此の事は外の人に教えてやつてはいかんと云つた。

そのうちに晩方になつてしまつたので、野原のまん中の大きな木の下で寢ることにした。お爺さんはもうそんな事には慣れて居るもんで、ぢきに寢いつてしまつた。お爺さんが權助八兵衛に寢て居る最中、傍に居た二匹の犬が話を始めた。お爺さんはそれで目をさまして、默つてぢつと犬の話を聞いて居ると、一匹の犬が云ふことに

おらあ　先刻からどうか家のことが心配になつてしようがないが、どう言ふ譯づらなあ　と云ふ。するともう一匹の犬も

お前もさうか　俺も先刻からそんな氣がしてゐたが、どうも變だよ、ふたりとも同じことを思ふなんて、きつと家の方に何かあるにちがひない、どうも心配になるなあ

すると先の犬が

俺がひとつとびに行つて見てくるでなあ

そうか、そりやあ御苦勞だ、それぢやあそうしてくれるか

お爺さんはこの話を　犬が變な話をするなあ　と思つて聞いて居ると、一匹の犬が一目散にかけ出した。

お爺さんは又知らんうちに寢いつてしまつて、どの位經つたか知らんが目をさまして見ると、さつき飛んで行つた犬はもう歸つてきて、又二匹で大きな聲で話しをして居る。お爺さんが耳をすまして聞いて居ると、

俺が一生懸命飛んでつて家へ着くと、丁度泥棒がはいる所さ、お婆さんはそれを知らずに平氣で寢て居るのよ、俺はお婆さんを起さつと思つて椽の下へ入つてうんと吠えて見たけれど、お婆さんはそれでもまだ起きん、仕方がないので、俺は座敷へとび上つて行つてぢかにその泥棒に吠えついてやつた、そうしたらお婆さんもやうやく目をさまし、泥棒もおつかなくなつて

逃げ出した、それで俺もやつと安心して歸つて來たよ

そうか、そりやあ御苦勞だつたなあ

そのうちに夜があけて、お爺さんは二匹の犬をつれて家へ歸つて來た。さうしてお婆さんに　ゆんべ家に何かあつたずらよ　と言つたが、お婆さんはうそを言つて　いんね、何もありやせんと云つてゐた。お爺さんは　たしかに何かあつた筈だ　と云ふと　どうしてそんな事がわかるなつてお婆さんが云つたけれど、お爺さんはたゞにこ〳〵笑つてゐたゞけだつた。

それから、へえそれでおしまひな。

お國自慢

昔、伊勢の人と、美濃の人と、三河の人と、大津の人とが旅先で同じ宿屋へ泊つた。伊勢の人が　伊勢の天照皇太神宮樣には八十末社と云ふ澤山のお宮があるが、一里四方へ枝を擴げた大木があつて、八十末社は皆その大木の枝の下にあると云つた。すると美濃の人が　それは珍らしい話だが、美濃の國には一里四方へ擴がるやうな大きい牛の皮があると云つた。大津の人も負けん氣になつて　俺の國には一里四方へ蔓を延ばした自然薯がある　と云ひ出した。それまで默つて皆の話を聞いて居つた三河の人が、俺の國にはとても大きい太鼓がある。その胴は伊勢の國の一里四方へ枝を擴げた大木で造り、皮は美濃の國の一里四方に擴がる牛の皮で張り、緒締めは大津の一里四方へ延びた自然薯の蔓で締めてある、そうしてこれを叩くと八十末社へ鳴りひゞくと云つたので、今まで自慢をしてゐた人達はけつこう負けてしまつた。

化けたむじな

山の中に年寄りの夫婦が住んで居つた。お爺さんは右の目の上に大きな瘤が一つあつた。そのお爺さんは毎日山へ木を伐りに行き、晩にはおそくなつて歸つて來た。

或る晩お婆さんが待つて居ると、お爺さんがいつもの樣におそくなつて歸つて來た。戸をあけろ戸をあけろ　と大きな聲で呼ばるので、戸をあけてやつたらはいつて來た。お婆さんがちよつとお爺さんの顏を見ると、右の目の上にあるはずの瘤が、左の目の上にあつた。こりやおかしい、きつと貉か狸が俺をばかしに來たに相違ない　と思つたが、そんな事は顏にも出さず、いつ

もお爺さんにしてやる通りに足を洗つてやり、夕飯をたべさせて寢かした。するとぢきにいびきをかいて眠いつてしまつた。そこでお婆さんは手早く布團でぐるぐるまきにして、繩でしばつてしまつた。

さうかうして居るうちに本當のお爺さんが歸つて來たので　お爺さん〳〵、化け物をしばつたよと云つて、二人で力を合はせてそれを圍爐裡の上へ吊くし上げて、下から松葉で燻して燻して燻しからかした。そうしたら化け物は布團の中で大へん苦しがつて、とう〳〵死んでしまつた。下ろして繩を解いて見たら、千年もこう經た貉だつた。

父樣戀しやほうやれほ

昔ある所にお竹とお松の姉妹があつた。お母樣に早く死に別れて、お父樣に育てられてゐたがその中お父樣が繼母をむらつた。繼母はお竹とお松が憎くて憎くてしやうがなかつた。ある時、お父樣が町へ買ひ物に行くと云つて　歸りに何を買つて來て遣らず　と聞くと、お竹は銀の簪お松は笛と太鼓がほしいと云つた。　そいじやあ、買つて來てやるでいゝ子で居れよ　と云ひ置いてお父樣が町へ行つたあとで、繼母がお竹に、これでお釜へ水を一杯汲んで呉りようと云つて笊を渡した。お竹は川端へ行つて水を汲まつとしたが、笊ではどうしても汲めんもんで、シクシク泣いて居ると、一人の坊樣が來て　どうして泣いとるんだ　と聞いた。お竹が泣く理由を話すと、それじやあかうして汲め　と云つて、着てゐた法衣をぬいでジャブンと水をしめして、笊へ入れて、釜ん所へ持つて行つて、法衣の水を釜の中へしぼり込んで見せて呉れた。お竹はその法衣をむらつて、坊樣の仕たやうにして幾度も水を汲んで居る中に、釜一杯になつたもんで、繼母の所へ行つて、お母樣　お母樣、お釜の水が汲めましたと云ふと、繼母は、さうか　えらい早かつたなあ　と云つて釜の蓋を取つて見て、お松を呼んで、石をひろつて來て、それで火を焚いてお釜の湯をわかせ　と云つた。お松は表で石をひろい乍ら泣いて居るとまた坊樣が來て、何で泣いとるんだ　と聞いたもんで、泣く理由を話すと、それちやあこのとぼし油をやるで、これを石へ掛けて置いて火を燃やして見よ　と云つて種油の這入つた瓶をくれた。お松は云はれた通りにしてくどの火をたいて居ると、そのうちにお釜の湯がグラグラ煮え立つて來た。お松が繼母の所へ行つて　お母樣　お母樣、お釜のお湯がわきましたと云ふと、繼母は、さうかえらい早かつたなあ　と云つて釜の蓋を取つて見て、お竹を呼んで、お松と一緒に、いきなり釜

ん中へ突き込むと、そのまゝ蓋をして二人を殺してしまつた。

繼母は二人の死骸を裏の竹藪へ埋けて知らん顔をして居ると、お父樣が二人の娘へお土產を買つて歸つて來て、お竹とお松はどうしたと聞いた。繼母は、二人共遊びに行つたつきり、まだ歸つて來ん　と嘘を云つて居つた。お父樣は　さうかと云つたが、何だか心配で、　どこへ行つつらなあ　と云ひながら裏へ行つて見ると、竹藪に新しい筍が二本出て居つた。今頃こんな物が出るのは變だと思つて一本ポキンとをしよると、その筍が　父樣戀しや　ほうやれは、銀の簪やいりません　と云つて泣いた。そこでもう一本、ポキンとをしよると、また、父樣戀しや、ほうやれほ、笛も太鼓もいりません　と云つて泣いたもんで、急いで筍の根本を掘つて見たら、二人の子供がいけてあつた。お父樣は初めて繼母のしたことが判り、すぐに繼母を追ひ出してしまつたといふ話。

田舍者が上方へ行つた話

田舍者が上方へ旅に出かけた。日が暮れたので宿屋へ泊めて貰ふ事になつた。そうすると宿屋の亭主が、お客樣は此れから上洛なさいますか下洛なさいますか　と聞く。田舍者は何の事だか分らんので亭主に其の譯を聞くと、上洛とは都へ上る事、下洛とは下る事だと敎えて呉れた。田舍者はいゝ事を敎はつたもんだと喜んで、又次ぎの宿屋へ行つた。そうすると、宿屋の番頭がバチ〳〵と算盤をはぢいて居る。番頭さん〳〵お前樣は算盤で何をして居る　と聞くと、番頭は、わしは今二一天作の五で割つて居る所だ　と答へる。なる程、上方では割る事を二一天作の五と云ふと見える、此りやあ面白いと思ひながら、又次ぎの宿屋へ行つて泊つた。そうすると亭主が女衆に、朱膳朱椀を出して上げな　と云つたら、まつ赤なお膳とまつ赤なお椀が出て來た。成る程上方では赤い物を朱膳朱椀と云ふと見える、こりやあいゝ事を覺えたと喜んで行くと、向ふの方から巡禮が來て、人の家の門口に立つて御詠歌を歌ひながら　釋迦のハイ　と云ふと物を呉れるのを見て　はゝあ、人から物を貰ふ事を上方では　釋迦のハイ　と云ふのだな　と思つた。田舍者が旅から歸つて來て見ると、親爺が柿の木へのして行つて柿を取つて居るうちに、木から落ちて怪我をして大へんに血が出た。それで其の息は急いでお醫者樣ん所へ飛んで行つたが、上方で覺えた言葉を使ふのは斯う云ふ時だと考へて、お醫者樣〳〵、うちの親爺が柿の木に上洛し忽ち下洛して頭を二一天作の五、朱膳朱椀が流れ出したから藥を一服釋迦のハイ　と息もつかず

に喋べくつた。お醫者樣は何の事だか譯が分らず、もう一べん聞きなほすと、又　うちの親爺が柿の木に上洛し　と云ふ。何でも此れは急な病人にちがひないと思つて、急いで行つて見たら、親爺が柿の木から落ちて血だらけになつて、うん／＼うなつて居る所だつた。

歌よみの話

其の一

夫に死に別れたお神さんが、自分の黑髮を切るときに

長かれと願ふ命が短くて
いらぬ妾の髮の長さよ

と歌を詠んだと云ふ貞淑なお神さんの話を聞いた或る人が、家へ歸つて來て自分の女房に其の話をしたら、その女房は　妾だつてそんな歌位は詠める　と云ふもんで、そんなら詠んで見よ　と云ふと、斯う云ふ歌を詠んだ。

長かれと願ふ蒲團が短かくて
いらぬ親爺の足の長さよ

其の二

娘が艶文を書いて居る所を他人に見られたので、その娘は早速に歌をよんだ。

書くための筆だもの
艶文かいたとて誰が笑はず

この話を聞いた人が自分の娘に其の話をして聞かせたら、妾だつて歌ぐらい詠めると云つて、次ぎの樣な歌を詠んだ。

掻くための爪だもの
臀かいたとて文句あるまい

其の三

ある所の娘が稻刈りに出て野糞を放つたが、ふく紙が無かつたので、落ちてゐた柿の葉でふいた所を人に見られた。娘は早速に

恥はすつかり柿の葉で
　十月はかみ無月と人は云ふらん

と歌をよんだ、と云ふ事を聞いて感心した或人が、家へ歸つて來て娘にこの話をして聞かせると妾だつて歌位はよめる　と云つて次の樣に詠んだ。

いま出るは左ねじ糞
　口がえがむか　けつが裂けるか

鼻を切られた爺さん

ある所に二人の爺さんが隣り合はせに住んで居つた。二人はとても仲が惡くて、しじう喧嘩ばつかしして居つた。其の家の境に板塀があつて、片方の爺さん所の柿の木の枝が、塀を乘つ越してお隣の爺さんの方へ伸びて行つた。お隣りの爺さんは怒つて、鋏でチョン〳〵とその枝を切つたので柿の木は枯れてしまつた。

片方の爺さんは大事な柿の木を枯らされたので怒つて、お隣りへ力んで行くと、塀の外へ出た物やなにやあ切るのは當り前だ、此れからだつて出た物は切つちまふ　と云つた。

いま〳〵しいけれど、そう云はれて見りやあ仕方がない、何時か仇を討つてやれ　と思つて待つて居ると、そのうちにお客樣が來たので油揚を拵へて御馳走にしてやつた。そうすると其の油揚の堪らんいゝ匂ひが、お隣の爺さんの方へ匂つて行つた。油揚の好きなお隣の爺さんは、もう堪へれんやうになつて、塀の穴から隣りの方へ鼻を突き出して其の匂ひを嗅いで居つた。それを見た此方の爺さんは、鋏を持つて飛んで行つて、他人の領分へ此んな物を出しやあがつた　と云つて、其の鼻の頭をチョキンと切つてしまつた。

チンポンガラリンと三味線

昔或る所に三味線の大へん好きな人があつた。その人が　若しわしが死んだらどうか葬ひの行列に三味線を入れて、景氣よくやつて貰ひたい　と皆の衆に賴んだ。而しよく考へて見ると、どんねに三味線の好きな自分でも、本當に死んじまつたんでは、葬式の時いくら三味線を入れて面白可笑しくやつてくれたつても、それを聞く事も見る事も出來ん、こりやあ一つ死ぬ前に葬式の

眞似をやつて見たいもんだと、皆の衆に何で彼でお葬ひの仕度をさせ、自分は棺桶の中へ入つてその棺桶に穴を明けてそこから外の樣子を覗いて見える樣に拵らへ、サアやつてくりようといふ譯で、和尙樣を賴んで來て御經を上げてもらつた。さていよ〳〵野邊の送りといふ所で、今迄の葬式のチンボンガラリンの他に三味線を入れて、チンボンガラリン　チ、チンチン、チンボンガラリン　チ、チンチンと景氣よくやつて行つた。棺桶の中から覗いて見て居ると、皆の足どりが三味線が入つて居るので馬鹿に調子がいゝ。　こりやア面白い　とほく〳〵喜んで見て居ると、段々調子が乘つて來て、皆の足どりが浮いて來た。その中に調子づいて道傍の豆畑の中へ行列が練り込んで、夢中になつて畑の中をぐる〳〵と廻つて居る。チンボンガラリン　チチチンチン、チンボンガラリン　チ、チンチン。

何たら面白いお葬ひずら　と棺桶の中の男は喜んで見て居つたが、さてよく〳〵見ると、その豆畑は自分が精出して作つた大事な豆畑だつた。それとも知らずに行列はむしやくしやにその中を踏み廻つて居る。こりやいかんと思つたので、其の人は棺桶の中から　豆畑踏む奴ア不屆な　と大きな聲で呼ばつた。

チンボンガラリン　チ、チンチン　豆畑踏む奴ア不屆な

チンボンガラリン　チ、チンチン　豆畑踏む奴ア不屆な

そうして何時迄も〳〵調子づいた行列は、豆畑の豆を踏み潰してぐる〳〵と廻つて居つた。

片つぽつぽ

或る日、鶴と雁と鳩とが路で行き遇つて　どうだ一つ何所かへ行つて一杯飲んで來まいか　ウム家にばつか居つても面白くないでそれがよからず　と相談が出來て三人揃つて遊びに出かけた。そうすると田圃のくろでそれをきいとつた蛙が　俺も一緒に連れてつて呉りよう　と云ふもんで　そいちやあ一緒に行かまいか　と云つて、四人でお茶屋へ上つて酒を飲んだ。飲んどる中に段々醉つて面白くなつて來た。一つ歌つちあどうだと云ふ事になつて、鶴が　よしそれぢやあ一つ俺が三味をひかず　と云つて長い首をふつて　ツルンツツン　オヤ　ツルンツツン　とやると、雁もたまらん樣になつて　ガンガラガンノガン　オヤ　ガンガラガンガン　て囃し立てる。そうすると鳩が　ハツトセ　ハツトセ　と掛け聲を掛けて、皆で面白がつて遊んで居つた。そいだけえど蛙は何もせずに、大きな目をパタツパタツとさせて皆のする事を見て居つた。そうした

所が、皆で蛙も何かやれ、何かやれ　と云ふので、仕方なしに　ゴケツ〳〵ゴケツ〳〵　と鳴いて見たが、へぼい聲だつたもんで恥かしくなつて　俺あ先い歸る　と云つて歸つちまつた。そいからはあるかたつて、皆もいよ〳〵お歸りつちう事になつて、門口へ來て見ると、鶴と雁の履き物はあつたけれど、鳩の麻裏を片方蛙が履いて歸つてしまつて、蛙の泥だらけの草履が半分殘つて居つたんで　蛙の奴め草履をばくんで行きやあがつた　と鳩は怒て見たけれど、仕樣ないもんで鳩は片方の麻裏を履いて、しんごろをかきながら　片つぽつぽー、片つぽつぽー　と鳴いて歸つて行つたつて。

此のじようかいな

昔火の見の番所へ夕立樣が落ちた。落ちたのはいゝけれど大事な錠前を夕立樣が持つて行つてしまつたので困つた。どうかして取り返し度いとは思ふけれど、相手が夕立樣の事だで下手な話しも出來んし、困つて散々頭をしぼつて考へて見たが、どうもいゝ智慧が出て來ん。お酒でも飲んだら、又いゝ考が出るかもしれんと、皆で酒もりを始めた。だん〳〵お酒がまわつて來ると皆

唄をうたひ出した。その中に一人、さそくのいゝのがあつて、數へ唄の節で

一つ火の見の錠前を　出しておくれよ雷さん

と歌ひ出した。それを聞いた他の人たちもこりや面白いと云つて皆でそれに合はせて

ひーとつ火の見の錠前を　だーしておくれよ雷さん

と歌つた。そうするとその歌が夕立樣の耳に聞えたので、雲の間から一寸顏を出して見ると、大勢の人達が盛に歌つて居る。聞いて居るうちに段々面白くなつて來たので、夕立樣は雲の中から降りて來て、火の見の上で見て居ると、皆がいよ〳〵興に乘つて來たと見えて歌ひながら踊り出した。見て居る夕立樣も面白くて〳〵たまらん樣になつて、皆が

出ーしておくれよ雷さん

と云つた後へつけて

このじようかいな

と云ひながら、盜んで行つた錠前を皆の中へぽーんと投げ落して呉れた。そこで皆は喜んで、一層元氣よく踊つて踊つて踊りまわつた。

一つ火の見の錠前を　出しておくれよ雷さん　このじようかいな

鳩は八文　鳴四文

ある日、鳩と鳴とが錢を拾つて　俺が拾つたんだ　いや俺が拾つたんだ　と喧嘩して居つた。其所へ蟻が來て　お前達何を喧嘩しとるんだ　といつて仲へ入つた。鳩が　今此所で俺が錢を拾つたら鳴の奴めが、俺が拾つたんだと云つて取らつとするので、これは俺の物だと云つて居る所よ

と答へた。すると鳴も負けずに　嘘だ、俺が拾つたんだ　と云ふ。蟻がそれをなだめて　まア お前達靜にしとれ、俺がどつちへも無理の無い樣に分けてやるに　と云つて　どうだ俺に任せるか　と念を押した。鳩と鳴とは　それぢやあお前に任せる　と云ふと、蟻は

鳩は八文　鳴四文

と云ひながら、鳩へは八文、鳴へは四文渡して置いて

あとはありつたけ蟻の物よ

と云つて、澤山殘つたのを皆自分の懐へ入れてしまつた。

娘と猿

昔一人のお爺さんがあつて、そのお爺さんが一人の孫娘をひとねて居つた。その娘が大きくなつてけつこうな娘になつたら、山のお猿がお嫁に呉りようと云つて貰ひに來た。そこでお爺さんは　大事な娘をお猿なんかにやれるもんか　と云つて斷つたら、お猿は怒つて、お爺さんが苗代を作れば苗代ん中を踏んだいく、豆を播きやあ皆はじくる、柿がなりやあ皆取つて食つちまふ。どうにもこうにもしようがないもんで、お爺さんがお猿に　手前はどうしてそんな惡戯をするんだ　ときいたら、お猿は、娘を俺に呉れんでよ　とそう云つた。お爺さんは悲しがつて家へ歸つて來て娘にその事を話したら、娘はそんなら猿ん所へお嫁に行つてやらず　と云つて、猿にそう云ふと猿は喜んで娘をつれて山の自分の家へ歸つて行つた。娘は猿について行くと、此所らで云つたらほつきの樣な所へ出た。下を川が流れて居る崖の上のあぶない所に一株、とても大きい奇麗た花の咲いとるつゝじがあつた。娘はそれを見て　あの花がほしい　と云ふと、お猿は　よし來た　と直につゝじの木へ登つて行つてその花をとらつとしたので、娘が　それぢやあない、その上の枝だ　と云ふ。　よし來たこれか、それぢやあない、その上の枝だ　よし來た、これ

か、それぢやあない、その一番先の、一番大きな花の咲いとるのだ　と云ふと、よし來たこれだな　と猿は兩手で力一杯に其枝を折つた。その拍子に、猿が餘り力を入れ過ぎたもんで、枝と一緒に川ん中へドブンと落ち込んで死んぢまつた。

娘は家へ歸つて來てお爺さんにその事を話したら、お爺さんは　お前は悧巧な娘だ　猿をそうやつてだましたのは感心だ　これから猿めが出て來て惡戯をせんで氣樂になつた　と喜んで、それから永く幸福に暮して居つたつて。

姨捨山の話

むかしは六十の谷こかしと云つて、六十になると年が寄つて何にも出來んちゆうので谷へ轉かす事になつて居つた。或る村の百姓の父親が六十になつたので、お殿樣の云ひ付けで谷へ轉かさんならん事になつた。そこで其の息は父親を負ぶつて山ん中へだん〳〵入つて行くと、背中の父親は途々木の枝を折つて目標を拵へて居つた。父親〳〵お前そんな事をして又家へ歸つて來る氣ちやあるまいね、と息が聞くと、いんね、俺は歸らんが、汝の歸る途が分らんやうになると困るで、斯うして目標を拵へて置くのだ、と父親は云つた。それを聞いて息は、親の心が有難くなつて、山へ捨てれんやうになつて、其の儘父親を負ぶつて家へ歸つて來た、そうして家の椽の下へ隱してお殿樣へ知れんやうにして置いた。

そのお殿樣は大へんに無理な事を云ふお殿樣で、ある日村の百姓たちを集めて、灰で繩を綯つて來いと云ひ付けた。百姓たちは灰で繩や何か綯へようがないので皆困つて居ると、さつきの百姓は家へ歸つて行つて、椽の下の父樣に、今日お殿樣から灰で繩を綯つて來いと云ひ付かつたがどうすりやあいいか　と聞いた。すると父樣は繩を固く綯つて、其の繩を大事に燒いて灰にして持つて行けと教えて呉れた。その百姓は喜んで、早速教はつた通りにして灰の繩を拵へて持つて行つたら、他の百姓は誰も出來んのに其の百姓だけが云ひ付け通りにして行つたので、お殿樣は大へんにお賞めになつた。今度は法螺貝に糸を通して持つて來い　と云ひ付かつた。其處で其の百姓は又家へ歸つて行つて父樣に聞くと、法螺貝の先きを明るい方へ向けて置いて、糸の先きへ御ぜん粒を付けて、其れを蟻に喰へさせて口元の方から這はしてやると、糸が法螺貝へ通る　と教えて呉れた。百姓は教えられた通りにして法螺貝へ糸を通して其れを御殿へ持つて行つたら、お殿樣は大へんに感心して、こんな六づかしい事がどうして出來たか　とお尋ねになつた。そこ

で其の百姓は、實は父親を谷へ轉かす事が可哀想で、家へ連れて歸つて椽の下に隱して置きました、お殿樣の云ひ付けがむづかしいので、其の父親に聞きましたら、斯うしよと敎えて呉れましたので、其の通りにして持つてまゐりましたと正直に申し上げた。それを聞いてお殿樣は大へんに感心して、年寄りはよく物を知つて居るで大事にせんならんと云ふ事が分かり、それからして六十の谷轉かしはお止めになつた。

貂と三人の子供の話

或る日子供が三人でお宮の森で遊んで居つた。そのうちに一番小さい子が裏の方へ小用に行つたら、一匹の大きな貂が死んで居るのを見付けた。その子供は歸つて來て二人の友だちにそれを話すと、夫れは俺が先刻見付けて置いたんだ　と一番大きな子が云つた。すると二番目の子がイヤそうぢやあない、俺の方が先きだ　と云ふ。本當に見付けた一番小さい子も、俺が見付けたものをそんな事を云つちやあ無理だ　と云つて三人が爭つて居る所へ、白髮の生へたお爺さんが通りかゝつて、お前達は先刻から何を嗔嘩しとる　と聞く。すると一番小さい子が　俺の見付けた貂を、他の衆が己れんだ　と云つて取つちまはつとする所だ　と話した。他の子供も負けては居らず、イヤ俺のだ、俺が搜したのだ　と云つて强性を張つた。お爺さんは三人の云ふ事を默つて聞いて居つたが、ヨシ〳〵良い事がある、テンと云ふ字を一番澤山入れた歌を詠んだものが、その貂を取つたらいゝぢやあないか　と云ふ。すると一番大きい子が

此のテンを名古屋の町に持ていたら　大きな金にならうもの

と云つた。すると二番目の子が

此のテンを名古屋の町へ持ていたら　大きな金になるテンテン

と云つて、もう此の貂は俺の物だと云つた樣な顏をして居つた。すると一番終いに小さい子が勢よく

此のテンを名古屋の町へ持ていたら　大きな金になるテンテン　其のまゝ其所にスッテンテン

と云つたので、とう〳〵本當に見付けた三番目の子がそれを貰ふ事になつた。

金杓子屋の傳兵衛

昔信州の山ん中から江戸へ行つて、金杓子の商賣をして大變に身上がよくなつた傳兵衛と云ふ男があつた。ある年、江戸が大火事で、傳兵衛の家も丸燒けになつてしまつたので、燒け跡へ假名で　金杓子屋傳兵衛が龜井戸へ引つ越し申し候　と書いた立て札をして、龜井戸へ引つ越して行つた。

江戸が大火事だと云ふ話を聞いて、傳兵衛の親類の者が心配をして急いで江戸へ飛んで行つた。そうして傳兵衛の家のあつた所へ行つて見ると、家は丸燒けで、その跡へ立て札がしてあつた、親類の者は其の立て札を見て聲をあげて泣き出した。通りかゝつた人が、お前樣は何故そんなに泣くのだ　と聞くと、親類の者は、マア此の立て札を見ておくんな、カナシヤ　クヤシヤ　デンヘイガ　メイドヘヒツコシモウシソロ　と書いてある、傳兵衛は死んで冥途へ行つちまつた　と云つて泣いて居つた。

相撲取りと蛙

ある日一人の相撲取りが、夏の夜裸で田圃の路を歸つて來ると、蛙が田ん中で　マケタ　マケタ　マケタ　と鳴いて居る。相撲取りは大へんに怒つて　おのれ蛙の奴め、人を馬鹿にするな　と云つて追つかけると、今度は蛙は　カツタ　カツタ　カツタ　カツタ　と鳴いて逃げて行つた。相撲取りはそれで漸つと安心して家へ歸つて來た。

庄屋樣と狐

むかし下瀬の庄屋樣が、竹佐のお代官樣の所へ行かずと思つて、朝早く大明神原を通りかゝつたすると道端に大きな狐が一匹、いゝ氣持ちで寢て居つた。庄屋樣はよせばいゝのに、そうつと其の狐の側へ行つて、大きな聲でワーッと脅かした。びつくりして眼を醒ました狐は丸くなつて山の方へ逃げて行つた。

庄屋樣は用事をすまして、歸りがけに又大明神原へ來ると、まだそんねに遲くはないのに、もう方々が暗くなつた。こりやあ困つた　と思つて向ふの方を見ると、家が一軒あつたので、ヘイ今晩は　と云つて家ん中へ入ると、若い女の人が一人きり坐つてメソ〳〵泣いて居る。ようく見ると部屋のまん中に棺桶を据えて、お線香が立つてある。庄屋樣は　どうした　と譯を聞くと、亭

主が死んだもんで泣いとる所だ　と云ふ。そして此れからお寺へ和尚様を頼みに行つて來るで、そのうち此處で留守居をして居つて貰ひ申したい　と云つて、そのせの人はさつさと外へ出て行つてしまつた。

庄屋様もそろ〳〵怖くなつて來た。夜半に廊の中の一軒家で、棺桶の番をしながらブル〳〵と震へて居ると、夜がだいぶ更けたと思ふ時分に、棺桶の蓋がパチン〳〵とはぜ出した。そしてガランと棺桶が壊れたかと思ふと、何か黒い大きな物がニューツと其の中から立ち上つた。庄屋様は腰を抜かして引つ繰り返つてしまつたが、そのうちに漸つと性がついてよく見ると、廣い原のまん中の柿の木の下を、彼方此方と這ひ廻つて居つた。

こりやあ今朝の狐に化かされたんだな、と思つて急いで家の方へ歸つて行くと、又狐が一匹道端に丸かつて居る。此奴め　と庄屋様が脇差を抜いてスターンと斬り付けると、カチヤンと音がして脇差がをしよれた。よく見たら狐ぢやあなくて大きな石だつた。

狸と小間物屋

昔小間物屋さが、日が暮れてから山道を急いで行くと、向ふの方にチカーン〳〵と灯が見える。行つて見ると、家が一軒あつたので、其所へ寄つて　今夜一と晩泊めてお呉れ　と云ふと、家の中に女の人が一人居つて、サア〳〵お泊りなんしよ　と云つて早速泊めて呉れた。

小間物屋さは、こりやあ有難い　と思つて、火端へ上り込んで火にあたつて居つた。夕飯を貰つて食べて、又火端へ來て坐つて居ると、其の女の人が小間物屋さに、針は無いか　と云ふので、針なら幾らでもあるで見とくれ　と云つて、荷物ん中から出して見せてやつた。初めは一番細い針を見せてやると、その女の人は　こりやあ良い針だが細過ぎる　と云つて返へしてよこした、それで小間物屋さが其の針を莚へチクツト差したら　ア痛ッ　と其の女の人が云つた。小間物屋さは變だなアと思つたが、今度は小し大きい針を見せてやると。その女の人は　此れも氣に入らん　と云つて返へしたもんで、又莚の端へチクツと差すと　ア痛ッ　と又女の人が云つた。變だなアと思ひながら、又それよりも大きい針を見せてやると、此れでもいかん　と云ふ、そしてそれ

を莚へ差すと、又　ア痛ッ　と云ふ。こりやあどうしても變だと思ひながら、今度は一番大きい畳屋さの使ふやう針を見せたら　此れぢや太過ぎるで駄目だ　と云ふから、今度は小間物屋さはその針をしつかり握つて、莚の上へヅボ〳〵と力一ぱいにくすいだら　キャン〳〵キャン〳〵と大きな聲がして、女の人も、家も灯も、何にもなくなつて、小間物屋さは眞つ暗い山の中に一人つ切りで坐つて居つた。

其の山は狸の居る山で、をり〳〵人が化かされて困つたけれど、小間物屋さを化かした時、小間物屋さに睾丸へ針をくすがれて、それで死んじまつたので、それからは誰も化かされる人はなくなつた。

針はよい〳〵

ある村に夫婦者が住んで居つたが、亭主の頭に一本も毛のないのが悲しかつた。どうかして毛を生やさつと思つていろ〳〵して見たけれど、どうしても生へん。此の上は神樣にお頼み申すより外はないと、其處で夫婦は村の八幡樣へお百度參りをして、どうか私の頭へ毛が生へますやうに

どうか亭主の頭へ毛が生へますやうに、若し毛を生やして下さつたら、其のお禮に金の鳥居を差し上げます、どうか毛を生やして貰ひ申したい　と、一生懸命に御立願をかけた。

そうして少し經つて見ると、亭主の頭にチョン〳〵と黒い毛が生へ出した。こりやあ妙だ、と見て居ると、其のうちに眞黒い毛が一面に生へて來たので、二人は大喜びだつた。そこで約束の金の鳥居を神樣へ奉納せんならん事になつたが、お金がなくてとてもそんな物を拵へて上げる事は出來ん、と云つて神樣を欺しちやあ申し譯がない　どうすりやあいゝかと思案して居るうちに、うまい事を考へついた。其處で夫婦は木綿針の太いのを三本持つて神樣の所へ行つて、其の針のミヅの穴へ針の先きを通して、其れをお社の前でへお鳥居のやうに立てゝ、そして二人で

とゝさん頭ん　鉈で切るよな毛が生へた

と唄ひながら、節面白く踊つて居ると、そのうちにお社の奥の方の扉がギーッと開いて、白い着物を着た神樣が出て來て、夫婦の唄ふ歌に調子を合はせて

針はよい〳〵〳〵

と唄ひながら一しよになつて踊つた。針でよけりやあお暇しますちゆつて、夫婦は逃げる樣にして歸つて來た。

長い名前

むかし馬鹿な親があつて、生れた子供に、短い名前ではどうも豪そうでないで、長い名前を付けてやらずと云つて

まにまにまゝにしゆりしやりとつくりもつくりだあるまかいの万太郎

と云ふ名を付けた。

或る時母親が井戸へ落ち込んだので、万太郎に助けて貰はつと思つて

まにまにまゝにしゆりしやりとつくりもつくりだあるまかいの万太郎ヤーイ

と呼ぶつもりで、大きな聲で呼ばつたが、まんだお終ひまで云ひ切らん中に母親は死んでしまつた。それで餘り長い名を付けるもんぢあないつて。

（此の話は万太郎が河へ落ちて、それを見た母親が大きな聲で息の長い名を云つて、皆の衆を呼び集めて居るうちに、万太郎は流れて死んぢまつた、とも話して居る。）

爺さん山で草刈ろう

昔ある所に爺さんと婆さんがあつた。爺さんは山に草刈りに、婆さんは川へ洗濯に行つた。婆さんが川で洗濯をして居ると、上の方かお芋の大きいのが　ドンブリコツコスツコツコ　ドンブリコツコスツコツコ　と流れて來た。婆さんはそれを拾つて家へ持つて來たが、爺さんにやるのも惜しい、俺がひん飲め　と云つて、婆さん一人で食べちまふと、大きなおならがブーッと出たすると婆さんは　爺さんは山で臭かろう（草刈ろう）と云つた。

蛇の嫁樣の話

むかし一人の旅人があつて、道端に腰を掛けて煙草を吸ひながら休んで居ると、奇麗な娘が一人、何處からか出て來て、どうか私を嫁樣に貰つておくんな　と云ふ。その旅人が見ると大へんに奇麗な娘だつたもんで、嫁樣に貰ふ事にして家へ連れて歸つて來た。

二人は仲よく暮して居つたが、或る日亭主が外から歸つて來て見ると、家ん中でビショ〳〵と水の飛ぶ樣な音がして居る。不思議に思つて亭主が障子の隙間からソーッと覗いて見たら、家中水一ぱいになつて、そん中に一匹の蛇が長まつて泳いで居つた。それを見た亭主はびつくりしたが、待て〳〵此處で騒いちやあいかん、と思つて、家から少し引つ返へして、そして遠くの方からエヘンエヘンと咳き拂ひをして置いて、今歸つたよ　と云ひながら障子をサラッと開けて家ん中へ入つて見ると、先刻の水や何かはちよつとも無くて、奇麗な嫁樣が　お歸りなんしよ　と云つて坐つて居つた。亭主は　どうも不思議だなァ　と思ひながら、おつかなびつくりで居つた。

すると或る日、お風呂が沸いたでお入りな　と云ふので、亭主が入つて居ると、雨がザーッと降つて來た。早く傘を持つて來い　と亭主が云ふと、嫁樣は何を思つたかお風呂桶にビシャンと蓋を被せて、亭主が入つたまゝのお風呂桶を擔ぎ上げて山奥の方へ上つて行つた。そして深い谷底へドタンと卸して　これでいゝ　と云つた。亭主はびつくりして、ソーッと蓋の間から覗いて見ると、今迄の嫁樣が大きな蛇になつて穴ん中へ這入つて行く所だつた。こんな所に居つたんでは命が危いと、亭主は一生懸命になつて逃げ出すと、蛇は妻を見られたのが悔しい、と云つて後から追わいて來た。亭主は逃げながら、足許の菖蒲と蓬を取つて後の方へ投げてやると、蛇は其

所から先きへ追つて來る事が出來ず、亭主は漸つと危ない命を拾つて家へ逃げて來た。

それから後も、その蛇が美くしい嫁樣になつて家の側へ寄つて來るので、そのたんびに菖蒲と蓬を投げて蛇を追ひ拂つて居つた。後には四方の屋根へそれを挿して置くようにしたら、それから後は蛇の嫁樣は一寸も姿を見せんやうになつた。

琴三味線所

或る田舍者が京へ三味線を買ひに行つた。町の人に道を聞いてだん〳〵そつちの方へ行つて見ると、いゝあんばいに三味線や琴を賣つとる店が見つかつた。喜んで其の田舍者が其の店の前へ行つて見ると、假名で書いた大きな看板が立つてあつた、讀んで見ると　ことしやみせん所　と書いてある。田舍者は力を落して　今年しや見せん所か　それぢやあ又來年來にやあ駄目かなと云つてすご〳〵と歸つて行つた。

牛とお坊さん

ある日、山寺のお坊さんがぶらぶらと道を歩いて居つた。ぽかぽかと暖かい日であつた。だんだん歩いて行つて垣根の横を通つた。すると急に大きな　モーッ　と云ふ聲がして、垣根の破れた間から大きな角のある獸の頭がニューッと出た。お坊さんは腰がぬける程びつくりしてとび出したが、えいかん來てから後を見ると、別に追わいて來たのぢやあなかつた。お坊さんは今出て來た獸は何だつたかと考へて見たが、どうむ思ひ出せなんだ。

お寺へ歸るまで歩きしな考へたがどうしても思ひ出せん。一室へこもつて考へたけれどそれでもわからん、おかみさんは心配して　和尚樣どうかしましたか　つて聞いてもろくろく返事もせずに考へて居つた。

お夕飯になつたので、おかみさんはそこへ御膳を持つて行つて、和尚樣ご飯をお上りな　と云つても返事もせずに考へて居つた。おかみさんは無理矢理に御飯をたべさせた。和尚樣はご飯をたべる間も獸りこんで考へて居つた。御飯はたべてしまつたがまだ考へ付かん。

お坊さんはがつかりして　アーッ　と大きなためいきをついて其處へ寢そべつてしまつた。さうするとおかみさんが　和尚樣和尚樣、御飯をたべてすぐ寢ると牛になるつて云いますよ　と云つた。すると和尚樣は手をたゝいて　あゝさうよ、その牛よ　と云つた。

長くてこわい話

其の一

むかし天竺から長い長い褌へ　こは飯を包んで　ずる　ず
る　ずる　とおろして呉れたと云ふ話。

其の二

昔ある所の殿樣が話好きで、毎日家來達を呼んで面白い話をさせたけれど、どれも話が短かすぎて一向につまらなんだ。それでもつと長い話を知つて居る者を連れて來いと云ふ命令だつた。するとある日家來が長い話を知つて居ると云ふ男を連れて來た。その男は殿樣の前へ出てこんな話を始めた。

昔あるところに大きな米蔵が三万三千三百三十三棟あつた。そこへ蟻が一匹這入りこんで、米を喰へ出し初めた。先づ一粒づゝくはへては、出たり入つたり、出たり入つたり、入つたり出たり、出たり入つたり、入つたり出たり　出たり入つたり〳〵〳〵〳〵〳〵と同じ事を何時までも繰り返して居つた。そして三日三晩も出たり入つたりを喋舌りつゞけた。お殿樣もあきれて、大分米を運んだ樣子じやが、どれ位藏の米を運んだか　とお訊ねになつた。するとその男の云ふ事に　まだ　まだ　第一の米藏の三尺四方を運んだばつかで、話はもつとこれからでございます　と答へて、出たり入つたり、入つたり出たり、とのべつに喋舌くりつゞけて行くので流石に長い話の好きなお殿樣もとうとう甲を脫いで　もう其處らでよせ〳〵　と云つた。

彼岸とヒーガン

ある年の事、春が來たので、其の家の嫁が　彼岸が近くなつた　と云ふと、其れを聞いた姑

は　ヒガンぢやあないヒーガンだ　と云ひ出した。さあそれからと云ふものは、彼岸とヒーガンで嫁と姑とが仲違ひをしてしまつた。さんざ云ひ合つた後で、それぢやあお寺の和尚樣に本當の所を聞いて見まいか　と云ふ事になつた。

すると姑は、こつそり嫁に內緒で、簞笥に藏つて置いた十反の木綿のうちの五反を持ち出して和尚樣にそうつと其れをやつて、ヒーガンの方へ味方をしてお呉んなんしよ　と賴んだ。

嫁も拔からず、此れも內緒で殘りの五反の木綿を持つて和尚樣ん所へ行つて、自分の方へ味方をしてお呉んな　と賴んで來た。

さて愈々其の日になると、嫁と姑の二人はお寺へ行つて和尚樣の前へ坐つた。そうして二人共てんでに自分の方へ和尚樣が味方をして呉れると思つて喜んで居つた。

其處へ和尚樣が、尤もらしい顏付きをして出て來て、さて云ふ事に、

そも〳〵七日ある中で、前の三日がヒガンで、後の三日がヒーガンぢや、そしてあとの一日は和尚の預りにしとく

と申し渡して、これでお前たちの家にもめ（木綿）がなくなつたわい　と云つた。

千代松と桔梗が原

むかし或る所に千代松と云ふ子供があつた。お母樣に死に別れて、お父樣と二人で暮らして居るうちに、千代松の家へ繼母が來る事になつた。そして弟の伊代松と云ふ子が生れた。

繼母は伊代松が生れてからは千代松が憎くて憎くて堪らんやうになつた、そうしてどうかして殺して終はつと思つて居つた。

ある日お父樣は商賣に遠くの方へ出かけて行つた。繼母は此りやあいゝあんばいだと思つて、惡者をたのんで來て相談をした。繼母は千代松に　お前は死んだお母樣のお參りに、此の小父さんについて善光寺へ行つて來い　と云つた。

千代松は何にも知らんもんで、其の人について旅へ出かけて、桔梗が原と云ふ淋しい原のまん中まで來ると、その人は千代松を殺して草叢の間へ埋けて置いて歸つて來た。

そのうちに父親が歸つて來たけれども、繼母は何にも知らん樣な顏をして居つた。父親は千代松が居らんので、千代松はどうしたと聞くと、千代松は善光寺へお參りに行つたで、今に歸つて

來るら　と云つて平氣で居つた。父親は本當だと思つて、今日は歸るか、明日は戻るかと思つて戸間口の所へ立つて待つて居ると、鶏が裏の畑で

千代松は　千代松は　桔梗が原に今日七日　父が戀しと　トチ、リチン

と云つて啼いた。父親はそれを聞いて、不思議だなァ　と思つて桔梗が原へ千代松を捜しに行つた。だん〳〵に原の中の方へ行くと、土が高く盛り上つた所があつたので堀つて見たら、中から千代松の死骸が出て來た。お父様は悲しくなつて泣きながら、お坊様をたのんでお葬ひをして貰つて家へ歸つて來て、すぐに繼母を追ひ出してしまつた。

ひよこすか坊

昔ある所にひよこすか坊と言ふ人があつた。この坊さんがある日お觀音様へお參りに行かずと思つて、家を出る時に　今日はいゝ事がありますやうに　と祈つて出かけた。それはまんだ朝早くで、うすぐらい時分だつた。

少し行くと道に黑いものが落ちとつたもんで、何かいゝ物ぢやあないかと掴んで見たら馬糞だつた。一人でぶつぶつ腹を立てゝ見たが、どうしやうもない。又少し行くと黑い物があつたので、こんどは足で力一杯踏んで見たら、落し穴だつたのでひつ轉けた。もう腹を立てる元氣もなくなつてしまつた。

お觀音様へ行つてお參りして、お賽錢をあげて、あとで勘定して見ると、三文あげるつもりだつたのに七文あげてしまつた。今日はまァ朝からどうしたことすら　と悲しくなつた。しかしまァ神様に上げたのだでいゝわとあきらめながらかへつて來たが、腹がへつてたまらん。近所のお饅頭屋へとびこんで、三文置いて饅頭を十つかんで逃げ出した。すると店のおかみさんが後から追つ掛けてくるので、一生懸命逃げて、村ざかいまで來て後をふり返へつて見ると、もう誰も追わいて來ん。先づ〳〵と思つて、道ばたの石に腰をかけて、饅頭を食べずと思つたら、その饅頭はかたくて齒がたゝん、ようく見ると、看板に出してあつた燒物の饅頭だつたもんで、自分ながら運の惡さにあきれてしまつた。

それでも三文の錢が惜いので、また歸つて行つて、さつきの饅頭屋へとびこみ　燒物の饅頭などかざつて置くから惡い　とおこつて、おかみさんを打つ叩いた。おかみさんは　何によ云ふかおらほうは饅頭屋ぢやあないじやないか　と云ふので、よく見たらお鄰の家へとびこんだのだ

つた。さんざ怒られて頭を掻いてすご〳〵と家へ歸つて行つた。

瓜子姫子

昔爺さんと婆さんがあつた。ある日婆さんが川へ洗濯に行つたら上の方から瓜が一つぽこ〳〵と流れて來た。あんまりいゝ瓜だつたので、爺さんと二人で食べずと思つて、拾つて來て戸棚の中へ藏つて置いた。晩になつて爺さんが山から歸つて來たので、婆さんは戸棚からさつきの瓜を出して來て、切つて二人で食べずと思つたら、中から奇麗なお姫樣が出て來た。二人は子がなかつたもんで、此れは神樣が授けてお呉れたんだと思つて喜んで、瓜子姫子と名を付けて大事にしとねて居つた。

瓜子姫子は大きくなつて、奇麗な娘になつた。そうして機を織る事が大へんに上手だつた、それで毎日ちやん〳〵と機を織つて居つた。

或る日、爺さんと婆さんが用事があつて外へ行くので、瓜子姫子に留守居をさせて置いた。行く時に瓜子姫子に、あまのじやくが來るといかんで、留守の中に誰が來ても戸を開けるな と、

よく云ひ聞かして置いた。

瓜子姫子は留守居をしながらちやん〳〵と機を織つて居ると、山からあまのじやくが來て戸をこと〳〵と叩く。默つて居ると、瓜子姫子戸を開けておくれ と云ふ。いやだ、お爺さんとお婆さんに、誰が來ても開けるなと云はれたでいやだ と云ふと、ちよつとでいゝで開けてお呉れと云ふ。あんまり云ふので瓜子姫子が戸をちよつと開けると、あまのじやくは其の戸をがら〳〵と開けて中へ入つて來て、瓜子姫子を取つて食べてしまつた。そして其の着物を着て自分が瓜子姫子に化けて機を織つて居つた。

そのうちに爺さんと婆さんが歸つて來て、瓜子姫子に、よう留守をして居つて呉れた と云つて、お土產の御馳走を出して三人でおいしそうに食べて居つた。その時婆さんが、瓜子姫子の顏に血が着いて居るのを見て、どうした と聞くと、さつきけつまづいて轉て、其の時に着いたのだ と云ふ、それちやあ私が拭いてやらずと云つて、婆さんが手拭で瓜子姫子の顏を拭いたら、皮が剝げてあまのじやくの顏になつてしまつた。あまのじやくは化けて居つた事が解つたので、本當のあまのじやくになつて山の方へ逃げて行つてしまつた。爺さんと婆さんは初めて瓜子姫子が殺されて食べられて終つた事がわかつて泣いて居つた。

お小僧と甘酒

山寺に和尚様があつた、其の和尚様は甘酒が大へん好きで、いつでも一人で沸かして一人で飲んで、お小僧には一寸も呉れなんだ。甘酒が沸くと、手水場ん中へ入つてお小僧に隠れて其處で飲んで居つた。お小僧はそれがいま〳〵しくていま〳〵しくてたまらん。今日は和尚様が留守のやうだ、俺も甘酒を飲まずと思つて、火端で沸かして、若し和尚様が歸つて來て見付かると怒られるで、俺も手水場ん中へ隠れて彼所で飲んでやらずと。茶椀へ一ぱい甘酒を汲んで、それを持つて行つて手水場の戸を開けたら、和尚様が先きにちやあんと入つて居つて、お小僧に内しよで甘酒を飲んで居つた。

お小僧は此りやあしまつたと思つたが、なか〳〵こすいお小僧だつたので、『ハイ和尚様お替り』と云つて自分の持つて行つた甘酒の茶椀を和尚様に差ん出した。

石の正兵衛

昔或る村に正兵衛と云つてたいへん情深い正直た爺さんがあつた。家は貧乏だつたが、犬と猫と蛇を大へん可愛がつて飼つて居つた。

所が其處の殿様は意地の悪い人で、その正兵衛のことを聞くと　犬や猫は人の家で飼ふものだでいゝが、蛇を飼ふのはけしからん、と云つて殺すことをきびしく申しつけた。

正兵衛はせつかく飼つて置いたものを、殺してしまふのは、可哀想だと思つて、箱ん中に入れて、誰にも知れん様に椽の下へ隠して置いた。するとこの事が何時の間にか殿様の耳に入つた。俺の云ふことをきかん奴は召し取つて首をはねる　と云ひ出した。仕方なしに正兵衛は蛇に向つて、　お前をこのまゝ飼つておくと俺が殺されるさうだ、氣の毒だがお前をすてにやあならん而しうつかり近所へ捨てたら殿様の家來に見つかつて殺されるか知れんで、暫くの間辛棒して呉りよう　と云ひきかせて箱ん中へ入れ、そん中へ澤山に好きな餌を入れて、奥山の岩の間に置いて來た。

次の日正兵衛は山へ柴刈りに行き、柴を一と背負しよつて歸る途中で重たくなつたので、木の根に腰をかけて休んで居ると、睡くなつて、とう〳〵ぐつすり寢こんでしまつた。

目がさめて起きつとしたが荷が重くて仲々おきれん、變だと思つてよく見ると、何時の際にか昨日捨てた蛇が荷物の上にのさつて居つた。なんだお前か、それにしても馬鹿に重いぢやあないか　と云ふと、蛇はやさしく頭を下げて　なが〳〵可愛がつて下さつて、その上今度お暇乞ひをする時でも、澤山の餌までいたゞいて有難うございました。就てはそのお禮に差し上げたいものがある　と云ひながら、大きな口をあくと、口の中からころりと丸い玉がころがり出て、それと一しよに蛇の姿は消えてしまつた。

正兵衛は喜んでその玉を持つて歸つて來た。不思議にもそれから正兵衛には仕合せが續いて、何んでも欲いと思ふものがあると、何時かちやんと家にある樣になつた。そのおかげで正兵衛はだん〳〵身上がよくなつた。

すると又此の事が惡い殿樣の耳に入つた。殿樣はその石が欲くなつたので、正兵衛を呼び出して　ささまは珍しい石を持つて居るさうだ、一度俺に見せろ　と云つて其の石を取り上げてしまつた。それでも正兵衛はおとなしく我慢をして居つたが、家に飼つてある犬と猫とが承知せん、

或る日犬と猫は相談して、お爺さんには内緒でその石を取り戻しに出かけた。

殿樣はその石を土藏にしまつて置いたら、犬が其の藏つてある所を嗅ぎつけて土台の下を掘り猫がその穴からもぐりこんで行つて、うまくその石をとり返へした。歸りにはどうしても或る大川を渉らにやあならん。そこで犬は猫を負ぶつて川を泳いで渡つて行くと、川の眞中で猫は一匹の魚を見つけたので、思はず　やあ　うまさうな魚が　と云つたら、そのはずみに口にくはへて居つた大事な石がポチョンと川ん中へ落ちてしまつた。猫は申し譯がないと云つてそのまゝ川へ飛び込んで死なつとしたが、犬がなだめて二人は家へ歸つて來た。そしてお爺さんの前へ來て今日のことを話してあやまつた。猫は　申し譯のない事をしたでどんな重い罰でもして下さい　と云ふと、正兵衛は頭をふつて　いや〳〵そんな心配はいらんことだ、それよりか明日は何か御馳走をしてやらず　と云つた。

あくる日お爺さんは網を持つて大川へ魚とりに行くと大きな鯉がとれた。大よろこびで家へ歸つて來て其れを料つて見ると、その大鯉の腹ん中から昨日猫が落とした石が出てきた。

石は又お爺さんの手に戻つた。そしてお爺さんは久仕合せつゞきの身となつて、犬と猫と三人で何時までも樂に暮すことができた。そして誰言ふとなくお爺さんのことを石の正兵衛と云ふや

うになつた。

ウントコの話

昔ある所に物覺えの悪い小僧があつた。お母さんがその小僧にお團子を買ひにやらつとしたが途中で忘れるといかんと思つて　歩きながら團子〳〵團子〳〵つて云つて行つて、忘れん樣に買つて來いよ　と敎えてやつた。そいだもんで馬鹿の小僧は敎へて貰つた通り道々　ダンゴ〳〵　ダンゴ〳〵　つて云ひながら出かけて行つた。

だん〳〵行くうちに途中に溝川があつて、それを飛び越す拍子に　ウントコ　つて飛んだら、それからは　ウントコになつてしまつて道々　ウントコ〳〵　ウントコ〳〵ショ　ちゆつて餅屋迄行つて　ウントコを賣つとくんなんしよ　と云つた。餅屋のお神さんは困つてしまつて　うちにはウントコなんちう物は無い　と云ふと馬鹿な小僧は　無い譯は無い、うちで買つて來いと云つたんだで　と理屈を言ふもんで、餅屋のお神さんも困り返つて　馬鹿な奴には困つちまふと獨語を云つたら、馬鹿は怒つて傍にあつた棒をとつてお神さんの頭を力一杯ぶんなぐつた。

ア、痛い〳〵　とお神さんが頭を撫でゝ居ると、大きな瘤が出來たもんで　馬鹿にたゝかれてお團子の樣な瘤が出來た　と云つた。そうしたら馬鹿がそれを聞いて　ウンその團子よ　つて漸つとこさ思ひ出して、團子を賣つて貰つて歸つて來たつて。

獺と狐

雪が大へんに降つて寒い晩に、狐は『尻がしもげるスココンコン』と鳴きながら山の方から下りて來た。おなかゞへつたので、何か食べる物はないかと歩いて居ると、向ふの方から獺が魚を喰わへてやつて來た。狐はそれを見て獺に、お前はいゝ物を持つとるなあ、わしにも半分呉れんかと云ふと獺は　いゝとも　それぢやあ二人で半分こにして食べまいか　と云つて半分づゝ分けて食べた。

こんな魚をお前はどうして捕つたか、と狐が聞くと、獺は、そりやあわけはない、彼所の池の氷の上へ行くと穴の明いた所があるで、其の穴へ尻尾を垂らして居ると魚がそれへ食い付く、尻尾へこつ〳〵と何か當るのは魚が食い付いた證據だ　と敎えて呉れた。

狐は早速其の池へ行つて見ると、成る程瀬の云つたやうに穴の明いた所があつた。狐は此所だなと思つて、敎はつたやうに其の穴へ尻尾を垂らして居ると、そのうちに何か尻尾へこつ〳〵と當る、そりや魚が喰い付いた、一つぢやあつまらん、幾つもいつしよに捕つてやらずと思つて、じつと寒いのを我慢して居ると、幾つもこつ〳〵とさわる、狐は嬉しくて嬉しくて、それでも我慢をして居ると鷄が啼き出した。もうよからずと、尻尾を引き上げつと思ふとお尻がすつかり凍り着いてしまつて居る。狐はびつくりして、一生懸命に拔かつとして力んで居る所へお神さんが水汲みに來た。狐はこりやたまらんと周章てゝ居ると、お神さんはそれを見てびつくりして、大聲を出して村中の人を呼ばつた、皆はてんでに棒や木ん切りを持つて集つて來て、とう〳〵狐をたゝつ殺して食べてしまつた。

猪と龜

昔大ぜいの獸が集まつて力くらべをしたことがあつた。その頃は猪はまんだ首が長かつたし、龜はせいが高かつた。その猪と龜とが力競べをすることになつた。

猪と龜の押しやつこがはじまつた。あつちからもこつちからも、猪に力を入れるものと龜に力を入れるものと、それはそれは大さわぎだつた。けれどどうしたつて龜が猪に勝てる譯がない。とう〳〵龜は押しつぶされて、それであんな這いつくばつたやうな格好になつてしまつた。

勝つた猪は大威張りで　俺は力くらべにも强いが飛びつこも早いぞ　と言つてこれ見よがしに飛びだした。そしてえらい勢いで飛んで行つたが、道の曲り角に來た時曲れなんで、前にあつた大岩に頭をぶつつけて、とうとう首をつつこんでしまつた。それから猪の首があんなに短くなつてしまつたつちゆう事だ。

餅と和尙と三人のお小僧

昔あるお寺に、和尙樣と三人のお小僧とが住んで居つた。ある日和尙樣はお隣へ餅のお客に呼ばれて、さんざ御馳走になつた上、お餅を三切れお土產に貰つて歸つて來て、それを棚の上に載せて置くと、三人のお小僧はそれを見てけなるがつて、ちようきゆうにお經も讀めなんだ。

そこで和尙樣はお小僧に　お前たちの中でリンと云ふ字を一ぱん澤山入れた歌を詠んだ者に此

のお餅をやらず　と云つた。そうすると一人のお小僧がさつそく

錆びたりや錆びたりや赤いわし　麥飯に添へて食つたら腹はぼてリン

と歌つた。ウン此りやあうまい　と和尚樣はそのお小僧に一つやつた。すると又一人のお小僧が

リンリンと背戸に咲いたる櫻花　一と枝折れば花は散りリン

と歌つた。ウン此りやあ仲々うまいぞ　と又一つやつた。そうすると一ばん終のお小僧が

リンリンと腰に差したる小脇差　一と振り振れば首は落ちリン

と歌つたので、和尚樣は　ウン此れも上手だ　と云つて又一つやつたら、あとは空つぽになつてしまつた。それで和尚樣は仕方がなく

善哉や是非ない事を云ひ出して　餅を食はれて此れで困リン

と云つて頭を搔いたつて。

こぼしたご飯

或る村にお大盡の家があつて、一人の下男がそこに働らいて居つた。その下男は悪いくせで、御飯の時、こぼした御飯粒を拾つて食べることがいやで、膝の上のまでばら〳〵と下へ拂ひ落してしまつた。

その家のお神さんはそれを勿體ないと思つて、そのたんびにこぼれたご飯粒を拾つて、されいに洗つて干して置いた。毎日毎日三度三度のことなので、幾年かの間に積り積つてとても澤山になつた。

其の後その下男は暇を貰らつて出て行つた。こんな悪い癖の男だもんで、何處へ行つても働かしてくれる所がない。とう〳〵乞食になりさがつて、村々を貰ひ歩いて居つた。そうして廻り々々つてもと使つて貰つて居つたお大盡の家へ來て門口に立つた。お神さんが出て來て　おや　お前は　と云つてじつとその乞食の顏を見て居つたが　さう言やあほんに、お前のお米が家にしまつてあるよ　と云つて、洗つては干してしまつて置いたお米を大きな袋へ一つぱい持つて來て呉れた。乞食はそれを見て、昔の悪い癖を思ひ出して、大切なお米を粗末にした事が悪るかつたと漸つと氣が付いて、その親切なお神さんの前へ手を突いて謝まつた。

屁ひり嫁

むかし或る家で嫁樣を貰つた。そうすると其の嫁樣がどう云ふものか毎日悪い顏色をして悄れて居る。姑婆樣が心配をして、どうかしたかと聞くと、嫁はお恥しい事だが私はおならの出る病氣がある、それを怺へて居るので此んねに顏色が良くないのだ　と云ふ。おなら位は何でもない事だ、遠慮はいらんで何時でも出たくなつたら放るがいゝ　と姑婆樣が嫁に云ふと、それでは姑婆樣御免なんしよ　と云つて、お尻をまくつたと思ふとおならをブウ〳〵放り出した。そうしたら傍に居つた姑婆樣はとう〳〵其の屁に吹き上げられて、天井ん所まで舞ひ上つてしまつた。婆樣はくる〳〵と目が廻りそうになつたもんで　ヤァ嫁よ屁の口を止めよ　と呼ばつた。嫁は仕方なしに屁の口を止めると、姑婆樣は天井ん所から下へどさんと落ちて死んでしまつたとき。

蛇と蚯蚓

蛇と蚯蚓は昔は大へんに仲の好い友達だつた。二人とも土の中を潜つて遊んで歩いて居つたが其の時分は蚯蚓には眼があつたが蛇は盲目だつた。その盲目の蛇は歌が上手で、とても良い聲で毎日〳〵歌をうたつて居つた。蚯蚓は歌が大へん好きだつたけれど歌ふ事が出來なんだ。

ある日二人は土の中でパッタリ行き會つた。そしていろ〳〵と身の上話しをしとる中に、蛇は眼が見えんのが一ばんに悲しい、眼さへ見えりやあ外には何にも入らん　と云ふ。すると蚯蚓は　俺は眼やなにか欲しかあないが、良い聲で歌つて見たいもんだ　と云ふ。それぢやあ二人は眼と歌とを交換ままいか、そうすりあやお互に仕合になれるに違いない　と相談がまとまつて其の場で二人は眼と歌とを交換つた。

眼を貰つた蛇は嬉しくて嬉しくて、もう暗い土の中にやなに居る事が嫌になつて、土の上へ這ひ出して來たのに、蚯蚓は歌が好きだもんで、相變らず昔の通り土の下に潜つて、毎晩のやうに良い聲を出して歌つて居つた。

木の葉と咲く花の話

むかし或る所に身上の良い家があつて、其處の一人娘に聟を貰はんならん事になつた。

ある日、丁度秋で忙しい時分に、若い金毘羅參りが一人來て　俺は金毘羅參りの者だが、どうか使つて貰ひ申したい　と頼んだ。秋の取り入れで人手の欲しい時だつたので、それぢやあ使つてやらず　と云つて其の家では其の金毘羅參りを雇ふ事になつた。

或る日の事、越後獅子がトコトントコトン　ヒユー〳〵ヒユル〳〵と囃しながらやつて來て、色々面白い藝當をするので、家中の人は皆集つて來て見て居つた。そうすると二階から其の娘が下りて來て、越後獅子のまねつくりや逆立ちを見て居る中に、ふと金毘羅參りの姿を見ると、そのまゝふいと二階へ上つて行つてしまつた。金毘羅參りは初めて其の家の娘を見て、何と云ふ名前だと友達に聞くと、咲く花樣と云ふ名だと敎えて呉れた。その若い金毘羅參りは木の葉と云ふ名前だつた。

秋が片付いたので、皆の衆は山へ入つて木を伐つて居つた。木の葉はズイコ〳〵と木を伐りな

がら　咲く花樣と一緒になりたいものだ　と唄をうたつて一生懸命に働いて居ると、外の男衆たちは見て笑ひながら、馬鹿あ云ふにも程がある、長年奉公して居る俺達でさへ、一ぺんもお嬢樣と話をした事もないに、新參の手前なんか見ても呉れるものか　と云つて馬鹿にして居つた。

その中に娘が病氣になつた、親たちは心配をして早速お醫者樣を呼んで來て診て貰ふと、此れは氣の病だから早く娘の好きな聟樣を取つてやれ　と云ふ。親達はうちの娘が外へ行つて外所の男衆を見初めたとは思はんもんで、それぢやあ家ん中の男衆の中に好きなのがあるんずら、それなら其れを家の聟にして後取りをさしたが家の爲だ　と、早速大勢の男衆たちをお風呂へ入れ、新しい着物に着替へさして、髪を奇麗に結はして、そして台所にたら〳〵つと並んで坐らせた。そして娘を二階から呼んで見せると　イヤヂヤ〳〵　と云つて、トントントントンと二階へ上つて行つてしまつた。親たちは困つて、一人つきりあとへ殘つた木の葉を呼んで、お風呂に入れ、髪を結つて奇麗な着物を着せて、台所へ坐らせて娘に見せた。娘は二階から下りて來て木の葉の坐つて居るのを見て

天よりも高く咲く花に目をばかけるな

と歌ひかけた、そうすると木の葉はすぐと

天よりも高く咲く花も散れば木の葉の下に住む
と續けた。親たちは喜んで直ぐと其の木の葉を娘の聟に決めた。

御見舞に行つた聟殿

ある家で馬鹿な聟殿を貰つた。親類の家の建築のお祝に、其の聟殿がお客に招ばれたので、母親が氣を利かして、先づ向ふへ行つたら、新しい見事な普請だと云つて賞めた上で、戸か何かに節の穴があつたら、御家内の皆々樣、此の穴の所へ秋葉樣のお札をお貼りなんしよ　と云へと教えてやつた。

聟殿は母親に教はつた通り、向ふの家へ行つて、結構な御普請だ　と賞めて、そうしてうまく戸の節の穴を發見て、惜しい所に穴があるで、此處へ秋葉樣のお札をお貼りなんしよ　と云ふと其の家の人たちは、其の聟殿を　よく氣が利いたもんだ　と云つて賞めた。

すると間もなくお隣の家の馬が谷へ落ちて死んだ。その御見舞に行く時に、又母親が氣を利かして教えてやることに　こちら樣では馬が落ちて死になされて、まことにお氣の毒な　と云つて

馬の片脚を上げて見て　さても見事な肉附きだに、勿體ない事をしました　と云へと教えてやつた。聟殿がお隣へ行つて、教はつた通りに御見舞を云つたら、彼所の聟殿は馬鹿所か仲々悧巧な者だと云つて、皆の衆に賞められた。

そこで其の聟殿の思ふ事に、ハヽァ成る程、他家へ御見舞に行つたら、何時でもあゝ云ふ風に云へばいゝんだなア　と獨り合點をして居つた。

そのうちに近所のお婆さんが死んだ。聟殿が　御見舞に行つて來ず　と云ふと、母親が　お前行つて呉れるか、それぢやあ　と云つて、又御見舞の言葉を教えかゝつたので、聟殿は　もう知つとる　知つとる　と云つてサッサと出掛けて行つた。そして其の家へ行つて、死んだお婆さんの側へ寄つて　此れは美事な肉附きだが勿體ない事を致しました　と云つて、手を伸ばして片足を持ち上げて　惜しい所に穴があるで、此所へは秋葉樣のお札でもお貼りなんしよ　と云つたので、馬鹿聟の正体が現はれて皆の衆に笑はれた。

爺と婆と鼠の國

昔ある所に正直なお爺と、慾深婆があつた。お爺が畑作りに行つてお晝のお辨當を食べて居ると、おさいの煮豆が一粒コロコロッと轉れて行つて、小さい穴ん中へ轉れ込んだ。あれ、こんな場にこんな穴があつたんだなあと思つとると、穴ん中からいい聲で唄ふ上手な唄がきこえて來た唄がおしまひになつたもんで、又無理に煮豆をその穴へ入れてやると、やつぱりいゝ唄がきこえて來る。幾度も煮豆を入れちやあ唄を聞いとる中に、豆が無くなつてしまつたもんで、今度は、食べかけの御飯を皆入れてやると、何時までも何時までも穴ん中から面白い唄が聞えて來た。その唄がおしまひになると、小さな鼠が一匹その穴ん中から出て來て　お爺樣、先刻はどうも御馳走樣、お禮にわしの國へ連れてつてあげ度いで一緒に行かんかな　と云つた。お爺が是非連れてつておくれ　と云ふと、そいぢやあ、私がいいつて云ふまで目をつぶつておいな　と云ふのでお爺が目をつぶつてをると、鼠はお爺をつれて穴ん中へ這入つて行つた。鼠が目をあいてもいいつて云ふので目をあけて見ると、其處は鼠ばつか住んで居る國だつた。

お爺をつれて來た鼠が、これからお殿樣の御殿へ連れてつてあげるが、この國では猫の眞似だけはせんやうに　と云つて、鼠のお殿樣の御殿へ連れて行つてくれた。お殿樣は大變によろこんで、先刻は、大變御馳走を呉れて有難かつた。お禮に何でもお前の好きなものをやると云ふので其處らを見廻すと、いろ〳〵な寶物が一杯積んであつた。慾の無いお爺は、その中から一本眞赤に銷びた刀をもらつて、先刻の鼠につれられて、目をつぶつて前の畑へ歸つて來た。

お爺が銷刀を持つて家へ歸ると、慾深婆が、お爺の歸りの遲いのをおこつて、馬鹿爺、今頃まで何をしてけつかつたんだ　と云ふので、お爺が鼠の國から刀をむらつて來たことを話すと、慾深婆は、よけい怒り出して　馬鹿ぢぢい奴、そんな銷刀一本ばか何のたそくに成る、明日は俺が行つてもつといゝ物をむらつて來ると云つた。

明けの日、慾深婆が畑へ行つて、お晝の辨當の時、煮豆を穴へあれ込ませて見ると、成る程お爺の云つた通り面白い唄がきこえる。慾深婆は、お爺の話した通りに眞似をして、食べかけの御飯までその穴へ入れてやると、やつぱり何時迄も何時迄も唄がきこえた。唄が終ると鼠が出て來て、昨日お爺に云つたと同じことを云つた。お婆が目をつぶつて鼠の國へ行くと、矢張り此處では猫の眞似をせんなと固く云はれて、お殿樣の御殿へ連れて行つてくれた。お殿樣の前まで行つ

たら、そこには目もさめるやうな寶物が一ぱいに積んである、お婆は其の寶物が皆ほしくなつてしまづて、鼠共をおどかしてやらつと思つて　ニヤーゴと一と聲猫の鳴き眞似をすると、鼠達はそれ猫が來た　と大さわぎをして皆何處かへ行つてしまひ、あとには寶物も御殿も皆消えてしまつて、暗い穴ん中に慾深婆一人だけが殘つてしまつた。婆は仕方なく、どうかして地面の上へ出つと思つて、土龍みたいにもくもく土を押し分けて出て來た。お爺は一人、お婆の歸りを待ちながら、土間で餅をついて居ると、急に足元の土が動き出して、その土の割れ目から、土龍みたいな毛の生へたものが見えたので、鼠の殿樣からもらつて來て腰にさしとつた刀をぬいて、この土龍奴と云つてスボーッと切りつけると、それは土龍ぢやあなくて、慾深婆樣の頭だつた。

三人の繼子の話

昔ある所に三人の繼子があつた。或る日父親が町へ買ひ物に行くと云ふと、三人の子供が出て來て、總領は羽子板を買つて來て欲しいと云ふ、すると二番目の子は毬をほしいと云ひ、三番目の子は簪を買つて來てほしいと賴んだ。父親はよし〳〵と、お土產の約束をして出かけて行つた。

父親が留守になると、繼母は三人の子供が憎くて憎くてたまらんので、父親の買つて來て呉れるお土產を樂しんで待つて居る三人の子供を殺して、大きな樹の下に埋けて置いた。

晩方になつて父親が歸つて來る途中で、村はずれのお宮の森で、石に腰を掛けて休んで居ると、とても奇麗な鳥が一羽舞つて來て、大きな樹の枝にとまつて

とゝさまかゝさま戀しかないけれど羽子板いらん

と云つて啼いて飛んで行つた。父親は不思議に思つて居ると、又一羽の鳥が來て

とゝさまかゝさま戀しかないけれど毬はいらん

と云つて舞つて行つた。すると間もなく又その樹の枝へ一羽の鳥が來てとまつて

とゝさまかゝさま戀しかないけれど　簪はいらん

と云つて飛んで行つてしまつた。

父親は、自分の留守の中に何かあつたのか知らん、鳥が彼の樹へばつかり來て、彼んな歌を唄ふのは不思議だなァと思つて、樹の側へ行つて見ると何か埋けた樣な跡がある。急いで堀つて見ると三人の子供の死骸が出て來た。父親はそれを見て驚いて、此れはきつと織母の仕業にちがひないと思つて、家へ飛んで歸つて來て見ると、全くその通りだつたので、すぐに役人を連れて來て織母を縛つて牢屋へ入れてしまつた。

燕と雀

燕と雀とは昔は姉妹だつた。二人が仲よく暮して居ると、或る日の事、親が急病だと云ふ知らせがあつた。妹の雀は直ぐに飛んで行つて親の看病をして居つたのに、姉の燕はおしやれで、おまけに饒舌と來て居るので、親が急病で六づかしいと云ふ知らせを聞きながら、鏡へ向つて御化粧

をしたり、着物を着更へたりして、しやれ込んで親の家へ行つた頃には親は疾くの昔に死んで居つた。

早く飛んで行つて親の死に目に會へた雀は、それで今でも穀物の中で一ばん貴いお米を食べる事が出來るけれど、燕はおしやれをして居つて親の死に目に會へなんだ罰で、泥を喰はへては巣を作り、虫けらでなければ食べれんやうになつてしまつたのだ。

狸のきんたま

昔なァ、向ふの御富士山で「お先達」のお爺が柞蠶を飼つとつた事があつたつてなァ、その時の話だが、お爺が番小屋を拵へてそん中で夜火を焚いてあたつて居ると、結構な娘が來て、懐から風呂敷を出してお爺の前へ置いて、お爺、風呂敷のいゝのを買つて來たで見とくれ　ちゆつて擴げて見せた。變な事があつたもんだと思つたが、成る程きれいな風呂敷だなァ　ちゆつて見てやると娘は喜んで歸つて行つた。

そうした所が又次の夜もその娘が來て、昨夜の樣に風呂敷を出して　お爺、風呂敷のいゝのを買

つて來たで見とくれ　つて擴げて見せる。そいだもんでお爺も不思議に思つて、一寸その風呂敷い觸つて見たら、風呂敷がほんのりと温いもんで、ハテナと思つてよく見ると、細い毛が生えて居る。　ハ、ア此奴悪戯だなと思つて、　どれ〳〵、いゝ風呂敷だなア、よく見しよう　と云ひながら、火ばたにくべてあつた一番太い燃え木じりを持つて、その明りで風呂敷を見る樣な風をして、段々風呂敷へ近づけて行つた。　成る程こりやあいゝ風呂敷だなア　と云ひながら燃え木じりを風呂敷へじやあんとしやつゝけた。そうしたらその娘が　キヤン〳〵〳〵　と大きな聲で鳴きながら飛んで行つちまつた。狸の奴に違ひないと思つたら、矢つ張りその通りだつたわいと思つて、その次ぎの朝、あとをつけて行つて見ると、岩の穴ん中に大きな狸が睾丸を燒かれて死んで居つたつて。

こりやア本當にあつた話だつちうぞよ。

お風呂で澤庵を食べた聟殿

山家に馬鹿な聟殿があつた。その聟殿がある時嫁の里へお客によばれた。母親は自分の子が嫁の里へ行つて恥を掻いちやあ困ると心配して、いろ〳〵と聟殿に行儀を敎えてやつた。嫁の里へ行つてお客になつて、御ぜんがすむと其の後でお湯を呉れるで、其の時には　どうぞ澤庵を　と云ふもんだ、そうして澤庵を貰つたら、それでお椀のぐるりを結構に洗つて、そうして其の澤庵を食べながらお湯を飲むもんだ　と敎えてやつた。

聟殿は敎はつた通り、嫁の里へ行つて御馳走になつた。それがすむと聟殿に　お湯が沸いたでお入りな　と云ふ。聟殿は家を出る時、お袋が敎えて呉れたのは此所だな、と思つて、早速お風呂へ入つて、そしてそん中から大きな聲で　どうか澤庵をおくんなんしよ　と云つた。嫁の家の衆はびつくりして、やゝけて大きな澤庵を一本持つて行つてやつたら、聟殿は其の澤庵でお風呂のぐるりをゴシ〳〵と洗つて、其の後でその澤庵をお湯ん中でボリ〳〵と食べてしまつた。嫁の家の衆はびつくりして、あんな聟殿に娘はやれんと云つて家へ連れて來てしまつた。

機一反千兩

昔或る所に正直な息があつた。或る日山ん中で仕事をして居ると、獵師がやつて來て、其處へ舞

つて來た雉の鳥を擊たつとした。それを見た其の息は　可哀相だで其の雉を擊つ事は止して呉れんか　と獵師に賴んで助けてやつた。そうして家へ歸つて來て御飯を食べて居ると、其處へ奇麗な娘が尋ねて來て、是非わしをお前さんの女房にしてくれと賴む。その息は　お前さんの樣な奇麗な人は俺見たいな者の所へ來んたつても、いくらでも良い所へお嫁に行けるで、そうおせなと云つて斷つたけれど、娘はなか〳〵聞かず、二人はとう〳〵夫婦になつて仲よく暮して居つた。

そのうちに其のお神さんは機を織りたい　と云ふので、そりやあよからず　と云ふ事になつた。お神さんは　わしが機を織つて居る間は何事があつても覗いて見ちやあ困る　と云ふので亭主は云はれた通り毎日山へばつか仕事に行つて、お神さんの機を織る所は見んけれど、部屋の中からチヤン〳〵コロ〳〵　チヤン〳〵　コロ〳〵と、良い音が聞えて居つた。

亭主が山から歸つて來ると、お神さんは奇麗な反物を持つて來て、此の反物を町へ持つて行つて千兩で賣つておいなんしよ　と云ふ。亭主はびつくりして　いくら奇麗な反物だつても千兩なんて賣れるものか　と云ふと、いゝえ、機一反千兩と呼ばつて歩けば、きつと賣れますから賣つておいな　とお神さんは云ふ。亭主は仕樣がないからお神さんに敎はつた通りに町を呼んで歩いた

ら、本當に千兩で賣れてしまつた。それから後は毎日〳〵奇麗な反物を織つては町へ賣りに行つて、二人は大へんに身上がよくなつた。

機を織る所は決して見て呉れるな　とお神さんに云はれて居たけれども、どうも不思議でならんもんで、或る日亭主は山へ行く途中から引つ返へして家へ歸つて來て、障子の穴からそうつと中を覗いて見ると、一羽の雉の鳥が自分の羽根を皆拔いて機に織つて居つた。それを見た亭主はびつくりして聲を出したので、それを聞いたお神さんの雉の鳥は　長い間御世話樣になりました　と云つて其處を出て何處かへ行つてしまつた。

馬と犬と猫と鷄

馬と犬と猫と鷄とが同じ家に居つた、飼ひ主がむごくするので四人は相談をして家を逃げ出す事になつた。家を出た四人はブラ〳〵と當てもなく行くうちに、草臥れたので馬は犬と猫と鷄とを自分の背中の上に載せて、仲よく道中をして行つた。

行くうちに行くうちに日が暮れてしまつたので、四人は森の中へ入つて一と晩寢る事にした。夜

何か來るといかんと思つて、馬の上へ犬が上り、犬の背中へ猫が乘り、猫の頭へ鷄が乘つて寢る事にした。

夜半頃に不圖眼を明いて見ると人聲が聞えて來る、よく聞いて居ると二人の泥棒がお金を盜んで來て、それを此の森ん中へ來て配けて居る所だつた。そこで四人は相談をして、一つ此の泥棒を脅かしてやらつと思つて、一二三の掛け聲で　ヒン〳〵　ワン〳〵　ニヤン〳〵　トテコツコーと大きな聲で啼いた。泥棒はびつくらして取つて來たお金を其所へ放つて置いて、何所かへ逃げて行つてしまつた。四人はそのお金を皆持つて又仲よく道中をして行つた。

雪に埋もれた餅

山寺にお小僧があつた。お腹が空いてお腹が空いて仕樣がないけれど、和尙樣は吝くて、御飯をお腹一ぱい食べさして呉れん。仕方なしにお小僧は和尙樣にないしよでお餅を盜んで食べたが殘つたのを隱くして置く所がなかつた。彼所もいかん、此處もいかんと、散々搜した後に、庭の石燈籠の側を堀つて、其處へ埋けて、その場を忘れんやうに、その上へ石をめじるしにして置いた。

お小僧はそれで漸つと安心して居つたが、夜もだん〳〵更けてお腹が空いて來ると、埋けて置いたお餅の事を思ひ出して、食べたくて食べたくて仕樣がなくなつた。そこでお小僧は起きて出て庭の方へ行つて見た。そして標に置いた石を搜したけれども、可哀相に何時の間にか雪が一ぱい積つて分らんやうになつてしまつた。お小僧は悲しくなつて

雪降りて標の石も見えざれば
　埋けたる餅は土となるらん

と歌を詠むと、次ぎの間に寢て居た和尙樣が聞きとがめて　コラ小僧、此の夜更けにそんな塲で何をしとる　と云つて叱ると　ハイ和尙樣、何時か知らん間に雪が積つて、庭の景色が餘り美くしいので、思はず一首やりました　と云ふ。ホ、ウそれは感心だ、そして何とやつた　ハイ

雪降りて標の石も見えざれば
　埋けたる親は土となるらん

斯う詠みました　とお小僧が答へた。

和尚とお小僧と馬糞

むかし山寺の和尚樣がお小僧を連れて他所へ行つた。お小僧はめつたに遠くへ行つた事がないもんで、何を見ても何を聞いても珍らしかつた。それでやたらに和尚樣の袂を引つ張つて、和尚樣和尚樣と云つて話す。和尚樣はあんまりうるさいので、小僧や小僧や、そう見たり聞いたりした事を一々喋るものちやあないぞ、と云つて叱つた。

少し行くと汗が出て來たもんで、和尚樣は懐から手拭を出さつと思つたが懐にない。小僧小僧、わしの手拭を知らんかと聞くと、小僧は、さつき和尚樣の袂から落ちたで、わしは知らんと云ふ。小僧小僧、落ちた物を見たら後から來る者は其れを拾つて來るもんだ、と敎えてやつた。

和尚樣は馬に乘つてだん〳〵行くと、陽があたつて暑くなつた。それで、小僧小僧、笠を出せと云ふ。小僧が〝ハイ〟と云つて和尚樣に笠を差ん出したら、そん中に馬糞が一つぱい入つて居つた。小僧小僧、此の馬糞はなんだ　と云つて叱ると、ハイ和尚樣、落ちた物を見たら拾つて來いと敎えてお呉れたで、さつき馬のお尻から此れが落ちたもんで拾つて置きましたと答へた。

憶病者と薄

昔しいしようの悪るい瑠璃淨語りが峠を越して行つた。淨瑠璃語りだもんで三味線を袋へ入れて、それを背負つて、峠の道をだん〳〵と上つて行くと、日が暮れかゝつて來た。其の人はしいしようが悪るいもんで、何か出にやあいゝがなア　とびく〳〵しながら歩いて行つた。峠へ上り切つた時分には日が暮れてしまつて、何にも分らんやうになつてしまつた。怖くて仕樣がないが、それでも峠まで上り切つたか、やれ〳〵　と思つて顏を上げて見ると、道傍に人が立つて居つて　こら〳〵　と云ひながら頭を振つて居る。其の人はしいしよう悪るだもんで、腰を抜かして其處へつくなつてしまつた。それでも口だけは達者に　アノモシ　私は御覽の通り旅から旅へ渡り歩いて居る淨瑠璃語りで御座ります、お前さんは大方俺にお金を出せと仰るんずらが、私は藝が身の上でお金など申す物は一文も持つて居りません、どうか御勘辨を願ひます、それとも私の藝でよろしければ、いくらでも御聞かせ申します　と腰が抜けたまんまで、地べたに手を突いてそう云つたそして一寸顏を上げて見ると　よし〳〵　と頭を振つて居る。そいだもんで其の男は喜んで、藝

でお許し下さるんなら、こんな嬉しい事はありません、それぢやあ早速一と切れ語りますでお聞き下さいますか　と云つて又一寸仰いて見ると又　よし〳〵　と頭を振つて居る。

其處で其の男は袋ん中から三味線を出して調子を合はせて、面白い淨瑠璃を一と切れ語つた。さあ此れでよろしう御座いますか　と云つて仰いて見ると今度は　いや〳〵　と頭を横に振つて居る。　それではもう一と切れ語ります　と云つて又語り出した。

語つて終つて　これで御勘辨下さいますか　と聞くと今度は　よし〳〵　と頭を振つて居る。それでその男は　やれ〳〵　と思つて、急いで三味線を袋へ入れて　夫れでは此れで此處を通して下さいますかと聞いて居ると、其の道側の追剝ぎは、淨瑠璃語りの首ん中へ冷い手をしやつ付けたので、キャツと云ひながら其の手を摑んで引き出して見たら、冷い手だと思つたのは雪の塊りだつた。こりやあ　と思つたら抜けた腰がはまつたので、立ち上つてよく見たら、人が立つて居ると思つたのは、人ぢやあなくて、薄の穗が十本ばか固まつて、それに雪がかゝつて、風に搖れて居つたんだつた。淨瑠璃語りはしいしようが悪いもんで、其れを見て追ひ剝ぎが居ると思つたんだ。

よし〳〵　と云つたのは薄の穗が上下に搖れて居る時で、いや〳〵　と云つたのはそれが横に搖れて居つたのだつた。

お化けなんかも皆自分で拵へるもんだつちうが、此の話の樣なもんで、道側の枯薄も、いよう悪るが見れば大入道にも追ひ剝ぎにも見えるもんだつちうが、それもそうずらえ。

爺さんと牡丹餅

昔或る所に身寄りのない一人のお爺さんがあつた。年を取つてだん〳〵に弱つて毎日寢てばつか居つた。その爺さんはとても牡丹餅が好きで、一ぺんいやになる程食べて見たいと口癖のやうに云つて居つたので、お隣りの親切なお神さんが、重箱へ十五しか入らないのに、その倍も入れて蓋がささらんので其のまんま持つてお爺さん所へ見舞に行つた。そして重箱のへんで其處へ置いて歸つて來た。晩方お神さんが又お爺さんの所へ行つて見ると、お爺さんはボロ〳〵涙を流しながら　俺ももう長い事はない　と云ふ。どうしてな　とお神さんが聞くと、あれ程好きだつた牡丹餅がどうしても食べ切れん、もう駄目だ　とお爺さんはため息を吐いて居る。お神さんは一つの牡丹餅が食べ切れんのかと氣の毒がつて、戸棚を覗いて見たら、あんなに澤山山盛りにあつた牡丹餅が、たつた一つ切り食べ切れずに重箱の隅に殘してあつた。お神さんも呆れて　それでもお爺

さんよう食べれたなむ、まんだなか〳〵死ねる所ちやあない　と云つて歸つて行つた。

菖蒲と蓬

其の一

ある人が友達の世話で、頭のまん中に口のある女を知らずに女房に貰つた。その女房が亭主に、どうかわしの御飯を食べる所を見て呉れんな　と云ふ。亭主は變な事を云ふなァと不思議に思つて、或る日そうつと障子の穴から覗いて見たら、女房が頭の毛を分けて、其ん中へ茶碗で何杯も何杯も御飯を掻つ込んで居る所だつた。亭主はそれを見てびつくらして、大きな聲を出したら女房は　あんねに云つて置いたものを　これを見られて悔やしい　と云つておつかない顏をして追はいて來た。亭主はたまらんもんで庭の隅つこにあるお風呂桶ん中へ這入つて隱れて居ると、女房はそれを見付けて、桶さら何處かへ擔いで行くので、亭主はどうかして逃げつと思つて、路傍の柿の木の枝へ飛び付いて、ぶら下つて桶から出た。女房はそれに氣が付いて、氣違ひのやうになつて後から追つ掛けて來るもんで、亭主は道側の蓬と菖蒲の繁つた中へ飛び込んで隱れて、そ

れでやつとこさ助かつた。
そう云ふ譯で、蓬と菖蒲は魔除けになると云つて、五月のお節句に屋根へ挿すんだつちゆう事だ

其の二

ある村に年頃になつた奇麗な娘があつた。その娘ん所へ毎晩毎晩、今迄についぞ見た事もない若い男が通つて來て、夜が明ける前に何處へ行くか歸つて行つた。その樣子がどうも不思議なので、ある晩その男が來た時、男の袖へ針を差して糸をつけて居いて、夜が明けてつから其の糸をたぐつて搜して行つて見ると、山の向ふの大きな淵ん中へ糸が曳つ込んである。それで水の底を覗いて見たら大きな蛇が死んで居つた。所が其の娘が男の胤を宿して居たので、母親が教えて菖蒲と蓬のお湯を沸かし、そん中へ娘を入れたら孕んで居つた蛇の子が皆下りてしまつたそうだ。

繼子と苺の實

ある所に繼子のお千代と、ほんの子のお花と云ふ二人の娘があつた。繼母は姉のお千代が憎くて憎くて仕樣がなかつた。
冬でとても寒い日に、お花は母親に赤い苺が食べたい　と强請んだ。そうすると繼母はお千代にお前此の籠を持つてつて苺を一つ杯採つて來いと云ひ付けた。お千代は籠を抱へて寒いのに足袋も履かず、素足に草履を履いて出て行くと、山にはもう雪がチラ〳〵と降つて居つた。彼方の山此方の谷と探して歩いたけれども、此の雪の降るのに苺や何かがある譯がなかつた。
雪は降るし、寒さは寒いし、お千代は歩き疲れて雪ん中へ倒れてしまつた。そうして居ると其のうちに、誰だか　お千代　お千代　と呼ぶ聲が聞える。氣が付いて見ると髪の毛の眞つ白いお爺さんが其處に立つて居る。そうして　お千代　お前は何を探しとる　と聞いたので、お千代はお母樣の云ひ付けで、苺を探して居ります　と答へた。そうしたら其の白髪のお爺さんは　お千代　此方へおいで　と云つて先きへ立つて行く。お千代が其のお爺さんの後について行くと、向ふの方の雪ん中に赤い苺がそれは美事に澤山生つて居る　さあ此れを採つてお歸り　と云つたなと思ふと、其のお爺さんは何處かへ消えて行つてしまつた。
お千代は白髪のお爺さんのお蔭で、苺を籠へ一つぱい採つて歸つて行つたら、繼母と妹と二人で美味そうに其の苺を食べながら、採つて來たお千代には一と粒も與れなんだ。

お花は今度は紫の苺が食べたいと、無理な事を云ひ出した。採つて來にやあ家へ寢かさんと云ふもんで、お千代は仕方なしに又雪の路を紫の苺を探しに行くと、又此ないだの白髪のお爺さんが立つて居つた。お千代は其のお爺さんに、紫の苺を採つて來いと云はれた事を話したら、其のお爺さんは大へん腹を立てゝ、此の世に無いやうな紫の苺を採つて來いなんて、そんな非道い事はない、今度は俺が思ひ知らせてやる、其の苺のある所へ連れてつてやるから來い　と云ふのでついて行くと、向ふの雪の降る谷に紫色の苺が一つぱいに生つて居つた。

お千代は其の苺を採つて籠へ入れて、それを持つて歸つて行くと、今度もお千代には一つ粒も呉れずに繼母親子が二人つきりで食べてしまつた。そうすると二人は俄かにお腹が痛くなつて、苦しみ出して、とう〳〵二人共死んでしまつた。躰が紫色になつて居つた。

紫色の苺は毒苺で、そんな非道い事をする繼母親子に神樣が罰を當てたのだつた。

狼を助けた話

昔ある所に一人のとても强い人があつた。或る夜急な用が出來て、其の人は峠を越して向ふの村へ行かんならん事になつた。大へんに暗い夜で、おまけに大きな木の繁つた、氣味の悪い峠で、晝間でも怖いやうな所を一人で平氣で登つて行つた。そのうちに向ふの方で變な音がする。又何時もの狸の悪戯だと思ひながら登つて行つたが、どうも狸のやうでなく、鼻をかく樣な唸り聲が聞えて來る。何だか知らんと思つて、聲のする方を提灯の火ですかして見ると、一匹の狼が大きな口を開いて、首を伸ばしたり縮めたりして居る樣子がどうも變だ。飛びかゝつて來る樣な樣子も見えん。

不思議に思つて其の人が狼の側へ寄つて見ると、狼は今まで立つて居つた前脚を折つておじぎをする樣子が何處か悪い所があつて助けて貰いたいと頼んで居るらしい。その人は强いもんで、それを見て　よし〳〵喉へ骨でも絡んだな、今取つてやるぞ　と、肌を脱いで、手を狼の口んの中へ差し込んで、絡んで居つた太い鳥の骨を取つてやつた　まあ〳〵こんな大きな骨だ、此れからは氣を付けんといかんぞ　と云ふと、狼はとても嬉しそうにクン〳〵云ひながら、ガサ〳〵と山ん中へ入つて行つた。

それから幾日も經つて、其の人は近所の家へこばし休めのお祝ひに招ばれて御馳走になつて居ると、外で狼の大きな唸り聲がする。皆の衆は青くなつてブル〳〵震へて居ると、其の强い人は

俺が行つて見て來る　と云つて戸を開けて見ると、何時か峠で助けてやつた狼が來て居つて、その人の顔を見ると猫のやうに順しく足許へ寄つて來た。其の人が頭を撫ぜてやると嬉んで其の人の手をねぶる　こないだの事がそんねに嬉しかつたのか　と云ふと、狼は側に置いてあつた黑いやうな物をドサンと戸へ放つて置いて、又山の方へゴソ〳〵と行つてしまつた。よく見たらそれは一羽の大きい雉の鳥だつた。ヤレ〳〵いつかのお禮に此んな物を持つて來て呉れたか氣の毒に、と云つて、其の人は狼の行つた方を見て居つた。

ほとゝぎす

ある山ん中に時鳥の兄弟が住んで居つた。兄の時鳥はづくなしで、一日中寢てばつか居つたが、弟の時鳥は順しくて、づくがよくて　毎日〳〵山を飛んで歩いて稼いで居つた。そうして兄さんの好きな山の芋を目つけて堀つて來て、其の一番まん中の美味しい所を兄さんに食べさせて、自分では兩端の筋ばつかの所を食べて居つた。

兄さんの時鳥はづくなしの癖に疑ひ深くて、俺に食べさせるお芋が此んねに美味い所を見ると、弟の奴め、自分ではまつと美味い所を食べとるに違いない、憎い弟奴ちゆつて、可哀相に弟を殺してしまつた。そうして腹をさばいて見たら、そん中からお芋の筋の所ばつかゞ出て來たので、漸つと弟の正直だつた事が分かり、自分の今迄仕た事が惡るかつたと氣が付いて後悔して、それからは夜半になると　弟戀し　弟戀し　と悲しい聲を出して、弟を呼ばつて鳴くやうになつたんだつて。

蜂と蜘蛛と蟻と財布

蜂と蜘蛛と蟻の三人がある日お伊勢參りに出かけた。だん〳〵行くと其の途中に財布が落ちて居つた。急いで拾つて中を覗いて見るとお金が一ぱいに入つて居る。其所で三人で其のお金を分ける事になつたら、てんでに慾が出て、此れは俺が見付けたんだ、イヤ俺が拾つたんだ　と喧嘩を始めた。そのうちに蟻が　待て〳〵　喧嘩をしたつても埒が明かん、俺がうまく分けて見せるでまあ俺に任かして置け　と、斯う云つて置いて　蜂は八文で蜘蛛は九文と、いゝか、其處でこの俺は蟻だからありつたけよ　と云つて財布さら自分の懐へ入れてしまつた。

娘が蛇になつた話

むかし山ん中に一人の獵師があつた。早く嫁樣に死に別れて、一人きりの娘を大事に大事にしとねて居た。

此の獵師は毎日獵に出かける時に、何時でもきつと桶から味噌漬を出して食べ、後は固く蓋をして置いて、娘に　俺の留守に此の桶へは決して手を付けるでないぞ　と云ひきかせて置いた。

娘は一人で留守居をしながら、父親が毎朝食べて行くあの桶ん中の物は何ずらと考へた。父さんが食べる位ならわしも食べたい、けれど歸つてから父さんに叱られると困るで、まあよさず　と娘は我慢しとつたけれど、たつた一ぺんだけ位なら父さんに知れる氣づかいはない、後でちやんと先きの樣に蓋をしとけばいゝ、一ぺんだけ食べて見て　と娘は桶の蓋を取つて中の味噌漬を一つ食べた。

少し經つと喉が乾いて〳〵て仕樣がない、臺所へ行つて水桶の水をみんな飲んで終つてもまだ足らん、前での池へ行つて池の水を飲むうちに飲むうちに、とう〳〵その池ん中へ入つて蛇になつ

てしまつた。

父親が夕方歸つて來て見ると娘が居らん　若しかと思つて桶を見ると、誰かゞ蓋を取つた樣子だ急いで前での池へ行つて見ると娘の下駄がのいであるし、おまけに池の波がもく〳〵と立つて居るので、娘はとう〳〵蛇になつちまつた　と云つて父親は悲しがつて泣いとつた。

桶ん中の物は本當は大蛇の味噌漬けで、獵師はきつい人にならつとして、毎日〳〵獵に出かける時にそれを食べて居つたのだつた。

嘘のつきじまひ

一日に一度は嘘を云はんと氣がすまんと云ふお爺さんがあつた。そのお爺さんがもう一と晩寢ると百二つになれると云ふ大晦日の晩に死んだ。その死ぬ時には近所の人達や親類の衆が大勢集つて來て居つた。愈々息を引きとると云ふきはにお爺さんは皆を枕許へ呼んで遺言をした。

私は今まで皆のお世話になつて、百の餘にもなるまで長生きをしたが、今夜は愈々暇だ。就いては長い間皆にお世話になつたお禮をせにやあならんが、相憎と何にもない、只私が少しづゝの

小遣をためて、箱へ入れてあの庭の柿の木の下に埋けてあるで、後でそれを堀つて皆で分けてくりよう。と斯う云つた。

皆の衆はいくら嘘つき爺さんでも、死にぎはにまで嘘は云ふまひと思つて、皆で柿の木の下を堀つて見たら、成る程古臭い箱が出てきた。皆は喜んでその箱の蓋をとつて見ると金は一文もなくてそのかはりに紙切れが一枚出て來た。ようく見るとその紙に「嘘のつきじまひ」と書いてあつた。

屁の親と子

山寺に和尚様とお小僧と居つた。そのお小僧はとても頓智のいゝお小僧だつた。ある日和尚様がお小僧を呼んで　小僧　小僧　今俺が屁をひるで、お前其奴を掴かんで見よ　と、そう云つて和尚様はお臀をくるりと捲くつておならを一つブーと放つた。後へ廻つて手を擴げ待ち構へて居つたお小僧は、すかさず飛び付いて　和尚様の睾丸を兩手でぎゆつと掴まへた。和尚様が　小僧やそりや違ふわ　と云ふとお小僧の云ふ事に　屁の親が逃げましたでその子の方を掴まへました。

一の枝に手が届くぞ

昔或る人が飯田の方へ用を達しに行つた。その途中で、日向の草ぼかに狐がいゝ氣持ちで寢て居るのを見つけて、ぽーんと石を投げてやると、うまく命中つた。びつくりした狐は痛そうな鳴き聲をして山の方へ逃げて行つた。

その人が用をすまして急いで歸つて來て、今朝行きがけに狐の寢て居つた近所まで來ると急にうす暗くなつてしまつた。もうとんなにおそくなつたのかと思つて大急ぎに急いだけれど、とう〳〵日がとつぷり暮れてしまつた。さあ困つたと思ひながら原ん中をさつさと行くと、向ふの方からチンボンガラン　チンボンガランとお葬ひの行列がやつて來る。その人はおつかなくなつたけれど戻る譯にも行かず、と云つて怖さは怖し、困つて路傍の木へ上つて小さくなつてぶる〳〵ふるへて居ると、チンボンガランの行列は向ふへ通り過ぎて行つてしまうかと思ふと、そうではなく登つて居る木の下へ來て、その木の周圍をチンボンガラン　チンボンガランとぐる〳〵廻つて居る。さうしてお終ひに棺桶を木の根元へ据えて、火を焚いて置いて行列の衆は歸つて行つてしま

つた。

木の上の人は生きた氣持ちもなく木にしがみ付いて居ると、そのうちに焚き火が棺桶に燃えついて、棺桶のたがゝパチンとはぜると、桶がガラ〳〵つと毀れて中から白い着物の死人がスーッと出て來た、そうして木の上の人を見ると、骨と皮ばつかの眞白い手をヒョロ〳〵ッと差ん出して震へた聲で『一の枝に手が屆くぞー』と一番下の枝へ片手をかける。木の上の人は死に物狂ひで上の枝へ登ると、今度は『二の枝へも手が屆くぞー』と又片方の手を二番目の枝へかける。木の上の人がこりやあと思つて又一段上へ登ると『三の枝にも手が屆くぞー』と一番下の枝の手を離して三番目の枝へヒョーッと伸びて來る。その人が又登ると『四の枝へも手が屆くぞー』又登ると『五の枝へも手が屆くぞー』と云つていくらでも死人の手が伸びて來る。

其の人はおつかなくなつて、一番うらんぼ迄登つたらとう〳〵枝が折れてドサンと高い頂上から眞逆樣に轉け落ちた。思はずキャッと大聲を上げると一しよに四方は元のやうに明るくなつた。よく見るとその人は土手の下へ轉け落ちて、薄の穗へ一生懸命にしがみ付いて居つた。

猿と蟹

むかし山奥に一匹の猿がすんで居つた。その猿の友達は近所の澤に居る蟹だつた。秋過ぎの或る日蟹は澤から上つて、美しい紅葉の山を眺めながら横這ひにのこのこと這つて行つた。丁度友達の猿も退屈して山から下りて來た所で、二人は途中で出會つた。猿は蟹に　やあ、久しぶりだつた　と云つて、自分の家へつれて行つた。猿は　よう來て呉れた　と云つて、栗や柿やその外いろ〳〵の山の御馳走を出してお客にした。蟹ははあるかぶりで珍らしい物を御馳走になつたので、喜んでお禮を云つた。歸りがけに　いつかおれの所へも來いよ　と云つておいて蟹は歸つて行つた。

それから幾日かたつて、猿は山を下りて蟹の所へ遊びに行つた。蟹は前のお禮だと云つて、鰻や鯰や鮨や鯉や其の外川の御馳走を皆出してお客にした。木の實や草の芽ばつか食べて居る猿にはこんな御馳走は初めてだつたもんで。美味くて美味くて仕やうがない。腹一ぱい食べたその上で、欲のふかい猿は、こんな美味い物をいつも食べて居る蟹が羨ましくなつた。自分もこんな美味い物をしじゆう食べたいと思つたから、かう云ふ魚はどうやつてとるのえ　と聞いた。蟹は

そんなことは造作もないことだ、とても凍る朝、川ばたの石の上へ坐つて尻尾を水ん中へ垂らして居ると臀が重たくなる程魚が喰い付くで、それをぐいとあげると背負いきれん程とれる　と教えた。猿は生れて初めてこんな御馳走を腹一ぱい食べたし、魚の取り方も教はつたし、こんないゝことはないと大喜びで歸つて行つた。

猿は山へ歸つてから、早く寒い日が來んかなァと、そればつかし待つて居つた。向ふの高い山に眞白い雪が降つて、毎日寒い風の吹く冬がやつてきた。愈々美味い魚を食べれる日が近づいたと猿はもう嬉しくて嬉しくて寒いことや何か忘れて喜んで居つた。

或る日晩方からとても凍み出した。猿はとび上る程よろこんで、その夜は寢れん程嬉しかつた。明日はどんねに澤山魚がとれる知らん、本當に背負いきれたんだらどうせずかと、そんなことを一晩中考へて居るうちに夜明けになつた。猿はまだ夜の明けきらんうちに山の家をとび出して、轉るやうにして澤まで下りて來た。川端の坐るにいゝ石を見つけて、その上へ坐り、お尻をさげて尻尾をなるたけ深く水につかる樣にして、魚の食い付くのを待つて居つた。尻尾の先がちぎれる程つめたい、お臀が痛い程つめたい、けれどあの美味い魚が食べれると思ふとつめたい事なんかはなんでもなかつた。

しばらく經つて少し臀を上げて見るとだいぶ重くなつて居る。こりやいやんばいに魚がだいぶ食つ付いたぞと思つたが、欲の深い猿だもんで、もつと澤山食つ付くやうにと今までよりもまつと深く尻尾を水ん中にたらして、つめたいのを我慢して待つて居つた。又しばらくたつて少し上げて見つと思つたが、とても重くて中々上がらん。猿はこりやあふんとに背負ひきれん程とれたぞよと思つた。

猿は嬉しくて嬉しくてたまらん、さあ一つ上げて見ずと思つて、躰中の力をこめて　うんとこしよ　と立ち上がつたら、ビチーンと尻尾の先はちぎれちまうし、お尻の皮はひとむけにむけてしまつた。可哀相に魚が澤山食つ付いたと思つたのはお尻が石へ凍りついて居つたのだつた。

それから猿の尻尾は短くなり、お尻があんなに赤くなつたのだそうだ。

ののの屋の娘

京ののの屋の娘が母親と二人で養子を捜しに出かけた。坂を上つて行くと一軒の茶屋があつたもんで、其處で休んで居ると、其處へ一人の若い衆が來て休んだ。そこで母娘はお銚子を一本つけ

て貰つて、其の若い衆にお酒を注いでやりながら、そのお銚子の底がその若い衆に見える樣にしてやつた。その底にはのの屋と書いてあつた。若い衆はお酒の御馳走になつて居るうちに、そののの屋と云ふのに氣が付いて、そうして其處を出かけて行つた。

それから幾日か經つて、その若い衆はボロ〳〵のへぼい着物を着てのの屋へ來て、どうか私を灰坊に使つておくんなんしよ　と賴んだ。母娘の二人は、それが峠で會つた若い衆とは氣が付かずに、家で使つて居るうちに、近所に芝居があつて、のの屋の衆は灰坊一人を留守居に殘して、皆芝居見に行つた。灰坊は家の衆が居らんやうになつたのを見て、急いで家中に鍵を掛け、もとの奇麗な着物に着替へて芝居小屋へ飛んで行つて、自分も役者になつて芝居をやつた。そうして其れが濟むと又急いで家へ歸つて來て、もとの灰坊になつて留守居をして居つた。のの屋の娘は其の芝居をした役者が灰坊とは氣が附かず、とても好きになつて病氣になつてしまつた。

それを見て灰坊は、のの屋から暇を貰つて出て行つてしまつた。そうしてしばらく經つて、今度は奇麗な着物を着て立派な若い衆になつて、又のの屋の門口へ來た。娘が二階から見ると、それは芝居をした自分の好きな役者で、前に峠の茶屋で行き會つた若い衆だつたので、娘は大へんに喜んで、すぐにそれを聟樣に貰ふ事にした。

世界中で一番長い話

大きな藏ん中にお米が何万俵も積んであつた。すると蟻が土臺の下へ穴を開けて藏ん中へ潛り込み、板敷の隙き間から上へ上つて、米俵を喰ひ破つて、そん中からお米を一と粒づゝくわへて巣の方へ運び出す。

蟻は巣から出て來て藏ん中へ入り、一と粒くわへて又外へ出る。そうやつて藏ん中へ入つたり出たり、入つたり出たり、入つたり出たり、入つたり出たり、入つたり出たり、入つたり出たり、

それを聞く人がいやになる迄繰り返へして云ふ、此れが世界中で一ぱん長い話だつちう事だ。

昭和九年六月五日印刷
昭和九年六月拾日發行

定價金八拾錢

著作者　伊那民俗研究會
長野縣下伊那郡飯田町七三〇番地
右代表者　岩崎清美
長野縣下伊那郡飯田町一七〇番地
發行者　山村正夫
長野縣下伊那郡上飯田町四五六二番地
印刷者　原田增藏

不許複製

研究社印刷

發行所　長野縣飯田町傳二　電話飯田二六七番　信濃鄉土出版社
發賣所　長野縣飯田町傳二　振替長野六二〇八番　山村書院

岩崎清美著

伊那の傳說

四六版三五〇頁
總クロース洋裝
定價金壹圓八拾錢
送料十四錢

大好評

大正十二年に「傳說の下伊那」を書いて、其の採集の精密と、行文の輕妙とを以つて絕讃を博したる著者の研究は、其の後、日と共に進みて今回再び此の書を刊行する事になつた。古き文化を有する伊那谷の古を語る傳說は悉く收められて此の一篇の中にある。鄕土を研究する人にとりては貴重なる資料たると共に、一般家庭に對しても實に絕好の讀み物である。是非共購讀せられんことを。

發行所　長野縣飯田傳馬町二六番地　振替長野二〇八番　山村書院

伊那民俗研究會編（第一輯）

山の祭り

四六版一八〇頁
寫眞圖版入
定價金九十錢
送料六十錢

鄕土研究、民俗學の方向は、今日の學界の最も興味ある問題となつて居る。從來一般に輕視せられて居た民間傳承に關する學問が今や正しき認識の上に立つ熱心なる研究者によりて次第に完成せられて行く事は喜びに堪へない。伊那民俗研究會が、村の生活に於ける感情意識や信仰の生活を鄕土人のみが持つ理解の下に、眞の意味に於ける鄕土研究を試みんとして伊那民俗叢書の第一輯に於て公にしたものが此の書である。信仰と生活との一致が今日も尙ほつゞく伊那谷の南端、三河の國境近きあたりの山村の祭禮行事は今や中央の學界に於ても貴重なる資料として注目せられて居るものが少くない。此の書一と度出でゝ初めて山村の嚴肅なる祭禮及びその行事の神秘の扉は完全に開かれたのである。

發行所　長野縣飯田傳馬町二六番地　振替長野二〇八番　山村書院

市村咸人著

南信濃尊王史

菊版六百頁挿圖百二十枚
總クロース金文字入豪華
定價金五圓送料二十二錢
豫約特價三圓五十錢

『伊那尊王思想史』出でゝより五年、今や思想國難の非常時に際し、殘本殆んどつきんとして需要の聲益大なり。建武中興六百年に際し、玆に誤れるを正し聊足らざるを補ひ新材料を增補し組織を更新して世の滿足に添はんとす。南信濃は平田學尊王論の發生地なり。本書南信濃を冠すれどもそは著者の謙辭に過ぎず立論內容共に全信州の尊王史たること目次を見るものゝ直に首肯する所なり。本書は南信濃を中心として全信濃の尊王事蹟を明にせんとするにあり。

（九月上旬刊行の豫定目下豫約募集中）

發行所　長野縣飯田傳馬町　振替長野二六〇八番　山村書院

世界出土文物展覽

651
26